

日本アジア振興財団（JAPF）

2014年春期インターンシップ論文集

期間：2014年2月22日（土）～3月5日（水）

対象国：ベトナム社会主義共和国総領事館及びカンボジア王国

参加人数：関西グループ：26名・関東グループ：21名

男女割合：男13名、女34名

日本国籍者：44名

日本以外の国籍者：3名

参加大学：青山学院大学、大阪市立大学、関西外国語大学、関西学院大学、近畿大学、神戸女学院大学、神戸大学、国際基督教大学、上越教育大学、専修大学、高千穂大学、多摩美術大学、中央大学、東京外国語大学、東京外国語大学大学院、東京学芸大学、同志社大学、奈良大学、日本大学、法政大学、明治大学、立命館大学、早稲田大学



発行：一般財団法人 日本アジア振興財団学生委員会

※個人情報保護の為、氏名は記載せず

JAPF インターンシップツアーを終えて

関西外国語大学 外国語学部 2回

私は今回、このインターンシップに参加して学んだことがあります。それは、価値観は人それぞれ違うという事です。これまで、私は恵まれた国々には旅行や留学で行く機会があったのですが、ベトナムやカンボジアといった国々に行くのは初めてでした。カンボジアに着いてまず感じたことは、やはり日本とは違う。特に、バズで移動している時に見えた景色の中で、田舎や農村に住む人々は今の生活に満足しているのだろうかと思いました。けれども、研修三日目で訪れた KURATA ペッパーのくらたさんにお話を聞いて少し感じ方が変わりました。それは、「日本人はあまりにも幸せな環境にいて毎日のありがたみを感じなくなっている。カンボジアの人々は、生きるために生きているから毎日が楽しい。」とくらたさんがおっしゃっていたからです。その後の研修では、幸せの感じ方や価値観は人それぞれ違うのだと思いながら研修に参加するようにしました。また、TAYAMA 日本語学校と YAMAMOTO 日本語学校でも衝撃を受けました。なぜなら彼らは明確な夢を持っており、それに向けてまっすぐで一生懸命で勉強にもとても熱心な姿を見せつけられたからです。日本の社会問題について授業をさせていただいた時、わからない事があればすぐに質問してくれて自ら学ぼうという意欲が私の何倍もあり、私は教える立場ではなく完全に彼らから学ぶ立場だなと感じました。

さらに、日本では目にすることのないような光景も目にしました。ゴミ山で生活するスカベンジャーの人々や、地雷の撤去作業に携わる人々です。ゴミ山は想像以上のゴミの量でこんなところで人々が生活をしていると思うと、背筋がぞっとしました。また、カンボジアが抱えている地雷問題にもじかに触れる機会を与えていただきました。こちらも日本で問題視されたことはなく、正直、あまり興味はなかったのですが爆破現場や DANGER ZONE の看板を見た瞬間に一瞬だけ命の危険を感じました。そして、ほんの数十年前まではここで戦争が起きていて実際に人々が負傷し、亡くなっていたと思うと本当に怖くなりました。

今回のインターンシップツアーで私はさまざまな人に会いました。今回のインターンシップのメンバーを始め、現地のツアーガイドさんにバスの運転手さん、訪問先の人々、孤児院の子供たち、ゴミ山で暮らすスカベンジャーの方々、日本語学校の学生たち。本当に色々な人との出会いがあり、さまざまな幸せの形と価値観を感じる機会がありました。今後は、今自分が持っている夢に向かって一生懸命に取り組んでいけるように努力し、また今回のツアーを機に発展途上国について多くの事を知ったのでこれを人々に伝えていき、今後何らかの形でベトナムやカンボジアに貢献できればと思いました。幸せとは他人が決めるのではなくその人自身が決めるもの。もっとたくさんの幸せを発信していきたいです。

「JAPF インターンシップスタディーツアーを終えて」

関西外国語大学 外国語学部 4回

自分の一生かけても解決できない問題の深刻さを目の当たりにした12日間でした。カンボジアとベトナムに住む人々には、私が想像していた以上に貧富の差があり、心の底から「幸せとは一体なんだろう」と感じたインターンシップスタディーツアーでした。

ゴミ山の人たちは少なくともそこで生活する中で幸せを感じる時がある。人は悲壮感が幸福感を上回ってしまうと生きていけないと聞いたことがあります。だから人は忘れるということをしします。最初は辛くても、脳が忘れるという作業をしてくれ、どんな環境でも慣れてしまえば、人は生きていけるのだと思いました。しかしその生活水準で本当に幸せなのかと考えたとき、先進国で不自由なく生活してきた私には、正直わかりませんでした。これほどの価値観の違いを感じたのは初めてです。

クラタペッパーのクラタさんの真摯なお話の中にも「今日という日を生きたいと思い、必死に生きようとしてきたか」や「社会に生かされてきた」という言葉があり、私の胸に深く突き刺さりました。必死で生きようとしてこなかった私は、豊かな環境の中で育ってきた人だと感じ、これから社会人として、少しでも周りの役に立てるように社会貢献していきたいです。

また私は現地の日本語学校の学生たちの学ぶ姿勢に感服しました。学生の背景には、家の手伝いの代わりに、2年間無償の授業を受け、将来少しでも良い生活ができるようにと周りから結果が求められているのかと感じた。日本では選ばなければ、仕事はでき、人並みの生活ができる。高い授業料を払って大学に行っている私たちは一体何者なんだろうと思った。この国では学ぶことは直接、生きる術を学ぶことだと感じました。日本で自分の勉学に対する姿勢を見直さなければならぬと強く感じた。貧富の差が勉強に対する姿勢に顕著に出ているのではないかと感じた。

このインターンシップで様々な人のお話を聞き、大きな刺激を受けました。社会人になる前にカンボジア、ベトナムの現状を知ることができ、どんな善意ある行動でも二面性があるということを改めて気付かされました。この研修を通して、自己満足のボランティアで終わるのではなく、物事の根本的な解決方法を考えていかなければならないと思いました。それがこのインターンに参加した私たちの使命だと思う。

発展途上国の現状を最低限、自分の周りに伝え、これから働く中で一体自分には何ができるのか考えていき、行動に移していきたい。正直、今の私には力がない。だから日本で力をつけ、将来はビッグになって、今回の研修で訪れた場所、人々に貢献したい。本当にこのインターンシップは私の心の中に深く刻まれました。自己満足で終わってしまうボランティア活動よりもこのような研修を通して発展途上国と関わったことに、JAPFの皆様には感謝致します。

インターシップを終えて

関西外国語大学 外国語学部 英米語学科 1回

私がインターシップスタディーツアーに参加した理由は「こんなことを学びたい」「こんなことを感じられたらいいな」という考えはなく、単純なもので「アンコールワットの遺跡修復作業は楽しそうだな」「ゴミ山を見てみたい」というものでした。このベトナム、カンボジアインターシップスタディーツアーを終えた今、本当に参加してよかったと思っています。そう思える理由は2つあります。

一つ目の理由は、たくさんの研修先を訪れることができ全ての場所でカンボジアでの生活、現状、価値観について深く考えることができたことです。たとえ友達や家族と観光を目的としてカンボジアに行ったとしても日本の文化と比べるだけで、日本には当たり前のようにある便利なものがなくて不満に思っていたと思います。でもそうではなく、世界にはたくさんの価値観があるのだと気づかされました。カンボジアについて考えるのはその時限りになってしまわないように、ときどき研修先でメモしたものを見返しながら一生大切にしていきたいです。

二つ目の理由はたくさんのいい出会いがあったことです。ガイドのユイさん、スメイさんのおかげで現地の人と円滑に話を進めることができました。また訪問先である孤児院の子どもたちは元気いっぱい人懐っこく、言葉は通じなくても、気持ちとジェスチャーで繋がることができました。日本語学校のみなさんは私と同じ年齢か少し上ぐらいの方たちで、日本語を学ぼうとする意識がすごく高く正直その姿勢には驚きました。私は大学で英語を学んでいるけれど、自分の意識の低さに恥ずかしくなるくらいでした。そして、このツアーで出会った皆さんと考え、学び、楽しみ、充実した時間を過ごすことができました。

日本に帰ってきて、またカンボジアに行きたいと思っています。このツアーで学んだことを日本で暮らしていてどう生かすか、すごく難しいけど私の課題にしたいです。本当にこのツアーに参加して良かったです。

Japan Asia Promotion Foundation

関西外国語大学外国語学部 英米語学科 1年

1年生でインターンシップなんてめずらしいねと多くの人に言われましたが、参加を決めたときはあまり深い理由などは特に考えていませんでした。日本以外の国に興味があったし将来は貧国のために働きたいなと思っていました。

どんな景色が待ち受けているかと思いましたが私が想像していたものとはかけ離れていて少し落胆したのを覚えています。農村などにも行きましたが何かが違う気がしました。日本語ペラペラの方がいたしテレビもプロジェクターもあるあの農村が本当に貧しいのかと不思議に思いました。私はバスの長時間移動のときに見た今にも壊れそうなぼろ家しかない光景がカンボジアの本当の農村の姿なのではないかと思いました。ですがカンボジアでの12日間は確実に日本とは違いツアーに参加したことに間違いはなかったと思います。また以前の私は何も見ずに何も体験することもなしに国際協力に携わりたいなど言っていました。考えは大きく変わりました。私の興味があった「教育がすべて」という考えはもしかしたらこちらの押し付けなのかもしれない、それに途上国に教育をもたらすにはそれを取り巻く本当に多くの問題と向き合わなければいけないし、突破口なんてないんだということがよくわかり、浅はかだったんだなと思い知りました。それはこのツアーでさまざまな側面からカンボジアをみることができたからです。よい意味でもわるい意味でも自分の将来像が揺らぎました。この現実を受け入れて本当に自分の職業にできるか、じゃあ明日からカンボジア行ってねと言われて素直にうなずけるか、などきれいごとではない自分の人間らしい一面にぶつかりました。それは少し受け入れがたかったですが気づけてよかったと思っています。途上国のために働くことは決してきれいごとなんかでは語れないのです。今の私にそれだけの度胸と勇気と熱意があるかと何度も考えましたがわかりません。ということは無理なのかもしれません。こんなに自分に自信がなくなったのは久しぶりでした。落胆もしました。そんなことかよという感じですがこれが私がインターンシップで得たいちばん大きなものです。帰国して親戚に会う機会があったのでこの話をしたらそれでいいのよ素晴らしいもっと迷いなさいと言われました。

私の中ではかなり大きな壁に直面しています。このような機会を与えてくれたこのインターンシップに感謝しています。もっともっと吟味していきたいと思っています。

ありがとうございました。

ベトナム・カンボジアインターンシップスタディツアー
関西外国語大学 外国語学部 2回

このツアーへ行く前は、カンボジアのことは何も知らなかったけれど、帰ってきてからカンボジアのことをすごくよく知れたと思ったし、得たものが多かったです。12日間、毎日違う研修先へ行っているようなことを感じることができました。

この研修で印象的だったことを二つ挙げたいと思います。

まず初めは、トゥールスレン収容所とキリングフィールドです。私は、ポルポトという人の名前を知ってはいたものの、いつの時代の人なのか、何をした人なのか全く知りませんでした。しかし、この二つの研修先へ行って、唖然としました。1970年代の出来事で、カンボジアで大虐殺が行われていたということを、この時初めて知りました。内容を聞いても、本当にあったこととは信じられないことばかりで驚くばかりでした。日本へ帰ってきてから、数日間ずっとポルポト政権や、クメールルージュについて調べる日が続きました。このことを知ってからカンボジアへ行くべきだったと、事前勉強しなかったことにすごく後悔しました。そういわれてみれば、確かにお年寄りの方をあまり見かけなかったな、と今では思います。

そして、次にゴミ山での研修です。バスを出ると、そこに広がっていたのは今までに見たことのないゴミの量とたくさんのハエでした。ここで、生活している人がいるのが信じられませんでした。奥に進んでいくと、ゴミを集めている人がいて何とも言えない気持ちになりました。同じカンボジアなのに、こんなにも生活に差があるものなのかと、実際に目の前の光景をみて強く感じました。ゴミ山へ行くまでもたくさんの研修先を見てきたわけですが、結局、私たちにできることはなんなのか、どこから手助けしていきべきなのか、何もわからなくなりました。この研修の後、意見交換をしたのですが、ゴミ山をなくすべきかどうかもわかりませんでした。正しい答えが見つからず、ずっともやもやしたまま、この研修がおわってしまいました。

また数十年後に、ぜひカンボジアを訪れたいと思っています。同じところに訪れて、どのような変化があったのか見てみたいです。そのためにも、私たちにできることは何か、私一人でもできることはあるのか、これからまだまだ考えて、実行に移していきたいと思っています。

このインターンシップに参加して本当によかったです。日本では考えられないことをたくさん考えさせられました。そして、出会った人みんなに感謝したいです。有意義な時間をありがとうございました。

インターシップを終えて

関西外国語大学 外国語学部一回

私は今まで発展途上国に行った事が無かったので興味を持ちテレビやインターネットで知るだけでなく実際に見てみたいと思いこのインターシップに参加しました。もちろん行く前には、事前学習や自分でも調べて、どのような所なのか想像していました。しかし、実際に現地に行くと想像を遥かに超えた現状がありました。「途上国」や「貧困」という言葉では表すことのできない衝撃的なものでした。12日間毎日驚きや悶絶することの連続でしたが終えて、整理して考えてみるとたくさん疑問に思う事や感情だけではない考えが来ました。

一つは価値観の違いです。日本人の幸せとカンボジア人の幸せ。もちろん同じ国でも人それぞれ違いますが、生まれ持った環境の違いは大きく影響すると思いました。日本では当たり前にある安全な水、整った道路、教育制度、雇用、安全な土地。日本は整いすぎぐらい環境が良い国だと思います。一方カンボジアはまだ環境が整っていないと感じました。しかしそれは日本人の日本人的な価値観から見た視点であって、カンボジアの人たちはどんな視点から見ているのかわかりません。もしかしたら環境が整っていないと思っておらず毎日を精一杯生きる方が幸せに感じているのかもしれない。生まれつき良い環境で育った日本人である私には理解できない部分もあるが価値観の違いをここまで目の当たりにした事はなかったです。

二つ目は、支援の形です。一つ目と関連しますが、先進国すなわち環境の整った国が支援することについてです。インターシップ中にも何度か支援についてディスカッションする機会がありましたが、支援とは何か？と考えさせられました。現状として、先進国ではすぐに治る病気で亡くなったり、貧しくて学校に行けない。そんな現状に対し医療技術支援や学校を建てる寄付など数えきれない支援がありました。支援のおかげで社会が発展し現状が改善されています。しかし一方では都市と農村の格差問題が社会問題になると思いました。支援はいいことだけれどもそれが都市ばかりで農村まで行き届いていない。都市に住む人の農村に住む又はごみ山で生活する人への偏見がある事、また途上国の経済発展にのって海外企業の進出も少し不安に思いました。経済発展は国を成長させることに必要不可欠なことだと思うけど仕方やタイミングをもっと考えるべきだと思いました。

これらのように、行くまではわからなかった事、考えてもみななかった事を気付かせてくれるとてもいい機会になりました。参加しなかったたらここまで途上国のことや支援の事についてわからないままだったと思う、考える時間は普段の生活ではなかなか難しいことだと思うので本当に良い経験になりました。この12日間はすごく濃くて肉体的・精神的にハードだけど自分を成長させてくれるし、学生時代にしかできない事だと思うので参加してよかったです。引率の方、過ごした仲間、現地の方に感謝しています。

カンボジア・ベトナムインターンシップスタディーツアーに参加して
関西外国語大学 2 回生

私にとって、このインターンシップで行くカンボジア・ベトナムが初めて行く海外でした。参加した理由のひとつとしては、昔から発展途上国に対するボランティア活動やその分野に対する取り組みに興味があったことからでした。しかし、行く前に何を見てみたいですか？と言われた時、正直思いついて言ったことは「アンコールワットを見てみたい。」でした。正直観光の方がメインに考え、研修はただ訪問先に行き、話を聞くだけでいいかな？と受け身に考えていた自分がいました。しかし、初めて行ったベトナムの戦争証跡博物館から私の研修に対する姿勢が変わって行った気がします。世界中の人がベトナム戦争の被害やその悲惨さを知ろうと集まっている博物館、そしてガイドのユイさんのお話を真剣に聞く周りの仲間たち、私も自然とお話に関わり込んでメモを取っていました。それから 12 日間いろいろな研修先を訪問する度に、そして仲間とディスカッションをする度に、カンボジア・ベトナムに向き合う私の感情や姿勢は変化して行ったし、自分にこんなにもたくさんの感情があったのかと気付かされることもたくさんありました。

カンボジアには、いろいろな子どもの姿がありました。孤児院で暮らす子どもたち、農村の小さな屋外にある学校に通う子どもたち、そしてごみ山でごみを一日拾い自分たちの生計を立てる子どもたち。同じカンボジアに住む子どもたちなのに、暮らす状況やその顔つきは全然違っていました。それぞれに困難な状況におかれたり、周りや他の国のひとたちからすると不幸な子たちだと思われていたりする子たちなのかもしれませんが、私は少なくともかわいそうだとはどの子たちを見ても思いませんでした。かわいそうとは思わなくても、自分の日本での生活を幸せに思ったり、逆に目的のない自分の生活をかわいそうに思ったりすることは何度もありました。例えば、ごみ山で汚れたからだや服で一日中ごみ拾いをして生計を立てている子どもたちも、お話を聞いてみると夢や希望はあるし、自分の人生を精一杯生きている子ばかりで、少なくとも夢も無くなるとなく日本で毎日を過ごしていた私よりも輝いて見えました。これは、日本語学校の生徒さんたちも同じことが言えました。私たちの日本の社会問題についてのプレゼンテーションを真剣な顔つきで一生懸命聞いてくれて、止まることなくたくさんの質問をしてくれました。生徒さん一人ひとりの勉強に対する真剣さ、情熱は一生忘れることができないものとなり、絶対に見習わなければいけないと思わせてくれました。

こうして感じたたくさんの感情を、研修後のディスカッションで仲間と話し合ったこともまた私を変えてくれました。私は正直大学で行わるディスカッションやディベートが嫌いでした。一番の理由は自分の意見に自信が持てず、間違っていたらどうしようといつも思っていたからでした。しかし、この研修で感じたこと、思ったことをディスカッションで言う時はなぜかみんなに聞いてほしい！と思えました。それは、仲間が真剣に研修先で見たこと聞いたことを共有しようとしていて、私の意見も真剣に聞いて意見を言ってくれた

からでした。その状況が心地よくて、私のディスカッションに対する姿勢は変わって行きました。

この12日間は私にとって本当に意味のあるものになりました。帰国してからも、毎日思い出して、ニュースや新聞でベトナムやカンボジアのことがやっている と目で追っています。この12日間で感じたこと思ったことを私の人生の何かに繋げていきたいです。まずはその明確でない何かを得るために毎日カンボジアやベトナムで出会った人々のように一生懸命生きるために生きていきたいです。

『カンボジアで見た幸せ』

関西学院大学 経済学部 2年生

私は今回「幸せとは何か？」という答えのヒントを探してこのインターンシップに参加しました。一年生の時に、経済の発展が必ずしも人々を幸せにするわけではないと感じたからです。あるデータを見ると、経済が成長するのに比例して最初は人々の幸福度も増加しますが、ある一定の時を過ぎると経済が発展しても人々の幸福度は増加せず、むしろ反比例して減少していきます。正比例していた経済成長がどこを分岐点にして反比例に変わるのかに興味を持ち、それを知るために経済が発展する前の途上国を自分の目で見て、肌で感じたいと思い参加しました。

今回の研修全体を通して私は「生きる」という言葉について深く考えさせられました。ベトナム戦争やカンボジアでの大量の虐殺という悲しい現実を知り、生きることは決して楽なことでも当たり前でもないということを強く感じました。私は今まで食べ物や教育環境に恵まれた世界に生まれ、便利なものが有り余った世界しか見たことがありませんでした。そんな世界を当たり前だと思い込み、明日も明後日もきっと何十年先もそんな毎日が存在すると思っているからこそ、その有り難味に気付くことができているのだと感じました。当たり前が「幸せ」を見えなくするのだと今は思います。そう感じたのはカンボジアで一生懸命に毎日を、今日を、今を生きる人がいたのを知ったからです。

また、今回の研修では私の探していた答えのヒントになる出会いがたくさんありました。日本語学校で学ぶ生徒やごみ山で暮らす人々などチャンスがあればそのたびに私は「将来の夢は何か？」と尋ねました。日本でこの問いを投げかけると大抵は「ない」や「就職できたところで働く」という答えが返ってきます。しかしカンボジアでその問いかけをすると全ての人が明確な夢を答えてくれました。カンボジアには夢を思い描き、一生懸命に生きる人が沢山います。その時私は、いくら経済が発展していても夢を見ることが出来ない若者が多い日本は必ずしも恵まれていると言えるわけではないと感じました。

現地ではしか見ることができないもの、そこに行かないと知り得なかった沢山のことに出会い、そこで自分が経験したことや、感じたことは私の一生の財産になると思います。ベトナムやカンボジアには日本と比べると未だまだ無いものが沢山あります。しかし、そこには日本にないものも沢山ありました。カンボジアを訪れ、経済が発達していなくても存在する「幸せ」を見ることができました。そしてそのことを知った私は夢を思い描き、一生懸命に生きていたら経済が発展していなくても「幸せ」は存在するのだと思いました。それと同時にカンボジアで夢を見て生きる人のパワーに圧巻しました。

最後に、いつも私のことを理解してくれ沢山の愛情で包み込んでくれる両親、今回の研修に携わってくださった全ての方々、研修で出会った現地の方々、そして12日間を共に過ごした仲間みんなとの出会いに感謝します。

インターンシップを通じて
関西学院大学 商学部 2 回生

インターンシップが始まって、最初は12日間という日数がとても長いように思いました。しかし終わってみるとあっという間で、とても充実したツアーでした。ツアー中たくさんの研修先に訪問しましたが、私の中で特に印象に残っているのは Tu Du 病院と地雷撤去の見学です。

事前学習で Tu Du 病院を調べているとあまりにもショッキングな写真があり、事前学習を中断してしまいました。ツアーで病院を訪れた時、その重い現実をどうやって受け入れたらいいのか、本当に自分は受け入れることができるのか、とても不安になりました。実際に Tu Du 病院ではショックの連続でした。ある一人の男の子が私の手を握っているいろんな部屋へ連れて行ってくれました。足のない女の子が椅子に乗って必死に近寄ってきてくれました。しかし私は子ども達の前でどう振る舞えばいいのかわかりませんでした。展示室ではホルマリンにつかった奇形児の赤ちゃんを見せてもらいました。そこには目を逸らしたくなるような現実がたくさんありました。中には 2008 年など最近生まれた赤ちゃんもいて、枯葉剤の影響が未だ続いていることを実感しました。小中高とベトナム戦争のこと、枯葉剤のことを授業で習いましたが、私はそれらを終わった出来事だと歴史として見ており、知ったつもり、学んだつもりになっていたのだと気づかされました。

今回のツアー中、地雷撤去の見学ができることになりました。地雷原に行くということでも多少不安な気持ちもありましたが、最初で最後の経験だと思い見学へ行きました。現場では作業員の皆さんはキャンプ生活をしており、休憩中にはバレーや水泳をすると聞いて、ここは本当に地雷が埋まっているのかと疑ってしまいましたが、少し離れた場所には赤の木の棒が何本も立っていました。土に埋まっている地雷を間近で見ることができましたが、人の手足を奪う悪魔の武器とは思えないほど小さなものでした。地雷の撤去作業はひとつひとつが手作業で、今の現場が終わるとまた次の現場へと移動すると聞き、地雷の撤去というのは果てしないものだと感じました。

インターンシップを通じて今後の自分への課題が見つかることができました。それは自分の考えをきちんと相手に伝えること、そして学びに対する姿勢を見つめ直すことです。ディスカッションではメンバー個々の意見を聞き、たくさんの刺激を受けると同時に自分の勉強不足、そして意見を伝えることの難しさを痛感しました。学んだことをちゃんとインプット、アウトプットできるようにしていきたいです。

インターンシップの感想 関西学院大学社会学部 1 回

最初は初めての海外という事で行くのがとても不安で、しかも参加した理由もなんとなく違う国の生活見てみたいな感じで他の参加者と比べたら明確な理由というのがなかった。だが、終わってみると私は、この研修では様々なことを経験し、知ることができた。

このインターンシップで様々な人々の生き方を見て、人の環境への適応力はすごいと感じ、何に価値を置くかが重要だと感じた。日本からの視点ではカンボジアは貧乏でみんな苦しい生活をしていてかわいそうという点でしか取り扱わないがそれは日本の価値観から見ているからだと思う。経済、医療の発展、教育制度、インフラ整備だけみれば日本は豊かな国に見えるがそれが幸せにつながるかなればわからない。ゴミ山での生活の中でも幸せと言っていた人を見てそのことを強く感じた。日本人は生かされているだけで生きようとするのが無くなってきている。幸せは生きようとしなければ、なかなか感じることは難しいのだと感じた。

シェリムアップ、プノンペンが想像より発展していた。その発展が国全体の生活水準を高めることに繋がったらいいと思う。海外からの企業を誘致して国を発展させていくだけでなく自国で強い企業を作っていくのがこれからのカンボジアには特に重要になってくるはずだ。日本語学校の生徒達は本当に勉強熱心で考え方私なんかよりもずっとしっかりしていたのでカンボジアをいい方向に進めてくれるはずだ。私自身は英語もしゃべれないし、何か学ぼうとする意欲もなかったが日本語学校の生徒達の影響うけ、いろいろ学びたいと思うようになった。英語をしゃべりたいとこのインターンで強く感じた。

言葉が通じなくても人と関わることができるということも知ることができた。特に子供と遊ぶのに重要なのはノリと勢いだと感じた。その点は日本の子供たちとカンボジアの子供たちは同じだ。子供たちは本当に元気で疲れ知らずだ。アンコールワット遺跡群でものを売ってきた子供たちも、農村の子供たちも、孤児院の子供たちも休むことなく動いている。

特にアンコール遺跡群でものを売ってくる子供たちのたくましさに度肝抜かれた。

このインターンシップで一番良かったこと、それは現地の人々、ガイドさんに自分の知りたいことを質問でき、様々な人と関わる事ができたことだろう。何でも質問することで、その人の考え方、国の風習などが明確になる。様々な人と関わる事で自分の考えを広げることができた。私の質問に嫌な顔せず答えてくれたガイドのスメンさん、ユイさんこのインターンでのメンバーには本当に感謝している。

このインターンでの経験がいつか自分にとって何かしら影響を与えるであろう。

JAPF 春季インターシップを終えて

関西学院大学人間福祉学部 2 回

私がこの春季インターシップに参加したのは、大学やバイト、友達と遊ぶという日常のなかで就職のことや将来のことを考えたときに、本当にこのままでいいのかと疑問に思い、これからどうするのかを考えるきっかけ、将来やりたいことをみつけるきっかけ、そうでなくても自分にとって何かのきっかけになればと思い、このツアーに参加させていただきました。実際にベトナム・カンボジアで行なった様々な研修や体験、学び、現地の方との出会いは私にとってよい刺激になり、自分の世界や興味の範囲、視点を広げる大きなきっかけになりました。

ツアーではごみ山や孤児院、戦争関係の施設などを訪問し、様々な研修を行いました。どの研修でも自分がいかにものごとを知らないのか、ということを感じさせられました。どれも平和で便利な生活ができる日本では知らなくても生きていけることですが私は何ぞ知らずにいたのか、知ろうとしなかったのか、自分自身すごく不思議で、研修を通して無関心でいることや知らずにいることの怖さというか、知ることまたは知ろうとすることの大切さを実感しました。

またごみ山で生活する人々や物乞いの人々、農村で生活する人々と出会い、貧困という状況を目の当たりにして、特にごみ山で生計を立てている人と出会って、この状況を何とかしないといけないと強く感じました。ベトナムの Tu Du 病院でも枯葉剤の影響を受けた子どもたちと出会い、衝撃を受けました。しかし貧困で困っている人々や障害を持つ子どもたちを目の前にして、自分が何かしたいと思っても自分にできることは思いつかなくて、その場でできることは何もなくて、そのことがすごく歯痒く感じました。自分の小ささにも気づかされました。

でも日本とは経済や生活環境が大きく異なるなかでも、カンボジアの人々は必死に生きていて、かつ笑顔でした。観光地で親を手伝って働いている子どもたちや、日本の学生(自分)よりも意欲をもって勉強している日本語学校の生徒さんたち、農村で暮らす人々、孤児院で暮らす子どもたち…。私が研修で訪れた場所で出会ったほとんどの人が笑顔を見せてくれました。「日本人は社会に生かされている。対してカンボジアの人々は生きることに必死である。」私にとって印象的なある研修先の方の言葉です。この言葉を聞いたとき、確かにその通りだと思いました。帰国してからはなおさら、そのことを実感します。日本では学校に行くこと、家に帰ると温かいご飯があること、便利な生活などは当たり前のことです。カンボジアでは日本の当たり前が当たり前ではありません。そんな社会でカンボジアの人々は生きていて、そんな人々の生きることに必死な姿、そしてその笑顔が私にはすごく輝いて見えました。カンボジアの人々を見ていると豊かさというものは、決して経済的な豊かさだけではないと気づかされます。

このインターシップでは様々な研修を通して多くのことを学ばせていただき、気づか

せていただきました。ベトナム・カンボジアでは色々と考えさせられることも多かったです。発展途上国の現状を知り、何かをしたいとも考えるようにもなりましたが、実際に私にできることはごく少ないです。できることはほとんどないかもしれないけど、今回の研修で得たもの、もらったものは今後どこかで生かせるはずで、これからどうするのが重要だと思います。カンボジアで感じたこと、学ばせていただいたことをいつかどこかで返せるように、何か形にできるように、生かせるようにこれから勉強もしっかりして、カンボジアだけでなく、それ以外の発展途上国の人々に対しても自分には何ができるのか考えていきたいです。私にとってこの旅は自分の世界を変える大きなきっかけになりました。

この12日間を充実したものにできたのはツアーを引っ張ってくれた引率の2人、一緒に様々な体験をしたメンバー、現地ガイドの方々、研修先の方々、現地で出会った人々、JAPFスタッフや関係者の方々、その他関係機関の方々、反対していたけど最終的に送り出してくれた両親のおかげです。本当に多くの方に支えていただいて、自分にとって価値のある研修にできたと思います。大変貴重な体験や時間をいただいたことに感謝したいです。ありがとうございました。

インターンシップに参加して

関西学院大学総合政策学部 1年

私は約2年間、カンボジアに想いを抱いていた。というのも、「平和」というテーマに人生をかけて関わりたいと願っていた私にとってカンボジアの内戦の歴史は外せないトピックだったからである。広島に生まれ育ち、無意識的に平和や戦争と密接に生き、平和や戦争を意識するようになってから長崎の平和資料館や韓国と北朝鮮の国境を訪れ、「平和とはなにか？」とい疑問に向き合ってきた。だからこそ、カンボジアの内戦の傷跡を目の当たりにした時私は何を感じ何を考えるのかが知りたかったのである。カンボジアを訪れた理由は上記のものであり、それと同時に「国際協力の在り方」についても考えを深める機会になれば良いと思っていた。

今回の研修で印象深かった研修先をいくつか絞るとしたら、カンボジアの「トゥール・スレン収容所/キリングフィールド」、「ゴミ山」、そしてベトナムの「Tu Du 病院」だろう。今回の旅の一番の目的であった「トゥール・スレン収容所」と「キリングフィールド」についてはある程度の知識を持っていた。だからこそ、自分の中にある「平和とはなにか？」という疑問に向き合うつもりでいた。だが収容所や処刑された人々の写真を目の前にした時、そんな疑問さえ考えることができなかった。頭が真っ白になった という日本語が適切なのだろう。人間の命とはこんなにも軽く、そしてこんなにも簡単になくなってしまふものだと痛感した。自分が立っている地面で誰かが殺され、誰かが泣き、誰かが何かを願っていた。思考は巡るが、どういうことなのか理解し難い。そんな感覚に襲われた。自由時間の時に一人で2階に上がると、涙をこらえることができなかった。悲しさからくる涙なのか、悔しさから来る涙なのかさえ分からなかった。ただ1つ確信したことと言えば、やはり私は「平和」というテーマを追い続けたいと再確認したことだけである。思考よりも感覚が先に働き、そして涙を我慢することができなかった。そんな場所がトゥール・スレン収容所とキリングフィールドである。

次に、カンボジアのゴミ山について私が考えたことを書こうと思う。ゴミ山では「国際協力の在り方」について考えることができた。ゴミ山で働いている25歳の青年は自身が小学校を中退しているという事実を受け入れながらも夢を語った。彼の夢は「先生になること」だった。日本人が語る夢と、ゴミ山の青年が語る夢は悔しいが同じとは言い難い。青年の夢は本当の意味での夢物語なのだ。その事実が、とにかくやるせなかった。だからと言って私たちがゴミ山を視察することで彼の夢は現実になるわけではない。多くの日本の大学生が国際協力をしている。国際協力を「する」とはどういう事なのだろうか。私には分からない。カンボジアを訪れることも、現状を見ることで刺激を受けることも、国際協力だと私は思わない。ゴミ山を去る際に、何人かのメンバーが自分の服や帽子をゴミ山の子供たちにあげていた。これは国際協力だと言えるだろうか。そもそも捨てるはずだった服をゴミ山に着ていき、目の前に喜んでくれそうな子どもがいたから渡した。極端な言い

方をすれば、捨ててゴミになるはずだったいろいろなものを都合よくあげただけなのではないだろうか。その行為をすることで「子どもの為になった」「国際協力をした」「良い行いをした」という感想を持ったならそれは自己満足にすぎないと私は思う。だが、実際に子ども達は喜んでいて、それは事実なのである。国際協力とは、何なのだろうか。部外者である私たちはどのように関わることが良いのだろうか。そんな疑問についてこれからももやもやし続けようと思う。

戦争という視点から、私にとって大きな衝撃を与えたのがベトナムの「Tu Du 病院」である。ベトナム戦争に関心を持っていた私は枯れ葉剤による人体への影響についても知っていた。でもそれでも、その衝撃と想いを言葉にすることができなかったのが「Tu Du 病院」である。枯れ葉剤の影響を受け奇形児として生まれてきた子どもたちと交流する時間があった。その時にある椅子に座っている子どもがジェスチャーで「だっこ」と訴えてきた。その子は表情の変化もなければ、話すこともできない、何歳なのかも分からない子だった。その「だっこ」という訴えに応えようとこの子を抱っこしようとすると、なぜかうまくいかない。見てみるとその子の身体が椅子に縛りつけてあったが為に抱こうとすると一緒に椅子も付いてきた。そして病院の先生らしき人に「No」と言われた。どうしてその子が椅子に縛り付けてあるのか、また、その子がどんな症状なのか私には分からなかったが、抱き上げることをできない現実には声をあげて泣きたくなった。そして Tu Du 病院に展示してあった奇形児のホルマリン漬けは一生忘れることができないであろう。瓶の中にあるものが人間であると信じ難く、でも確かに人間で。戦争はいかに愚かで残虐かつ悲しいものなのかと強く思った。

今回 JAPF のインターンシップに参加して、私は原点回帰できたように思う。これまで私を突き動かしていた平和と戦争への強い想いを思い出すことができたからである。参加者それぞれ学び感じたことは異なると思うが、間違いなく言えることは絶対にそれぞれのきっかけになったということだろう。JAPF のインターンという機会カンボジアに行く事ができて本当に良かったと心から思うことができる。この機会を絶対に次に繋げようと思う。

ベトナム カンボジア スタディーツアーを終えて
近畿大学経済学部 2 回

今回のインターンシップの研修内容はとても充実したものでした。一般の観光旅行ではなく、このインターンシップによるプログラムでベトナム・カンボジアの本当の姿を見ることができたことをとても感謝しています。戦争証跡博物館、クチトンネル、KURATA ペッパー、CCH 孤児院、キリングフィールド、ゴミ山など全ての研修先がすごく考えさせられるものでした。経済特区を訪れて日本の企業の発展途上国への参入の早さを知り、TAYAMA 日本語学校では自ら学ぶ姿勢というのを改めて自分にも問い直し、アキラ地雷博物館では現場で働く人の姿に心打たれました。また、日本がなぜここまで経済発展をできたのかもすごく気になりました。そして、何年も前の日本人の努力の素晴らしさに感動を覚えました。日本で戦争を経験した人はもうすぐいなくなりますが、カンボジアやベトナムで戦争を経験した人たちはまだまだ若いので、僕たちが彼らから戦争を学ぶ日が必ず来ると思いました。アンコール小児病棟では日本では大した病気ではないものもカンボジアではほとんどの子供が死に至ると聞いて、全体的な衛生の改善が必要だと思いました。ディスカッションの中でカンボジアに支援することが良いことなのか悪いことなのかという事がよく議論されましたが、人は皆生きる権利はあると思うので医療の支援はするべきであると思いました。

ホテルではシャワーが鉄の匂いがしたのですが、農村を訪問して村長から農村の人が飲む水は鉄分が多くて飲むと尿路結石になる人が多い事を知り、ここでも衛生管理と水道設備の早急な改善が必要とされている現実を目の当たりにしました。バスの移動中、窓からの景色がどこまでも広い草原とたまに現れる集落の繰り返しでした。村ではみんな高床式倉庫のような建物に住んでいるのですが、村人も **iphone** や **smartphone** を使っていて古代文明と近代文明が入り混じった生活に驚きました。

今までヨーロッパやアジアのたくさんの国を旅行してきましたが、今回の旅ほど刺激的なものはありませんでした。ベトナム・カンボジアなどの発展途上国は経済的にはすごく魅力的な市場です。ただインフラなどにもまだまだ課題があり早く参入する企業は少ないと思います。インフラでは水道設備の改善で、衛生面は格段に向上し、教育面では教師の育成の充実をはかることで知識人層も増えるので **GDP** は爆発的に向上すると予想されます。日本が東洋の奇跡と呼ばれたようにカンボジアの人々の意識次第では彼らも奇跡を起こせるのではないかと感じました。常にアジアの先を行き続ける日本の国民である僕たちが自分たちの置かれた状況に感謝しさらに努力することで日本という国がもっと大きくなり、それが結果としてカンボジアやベトナムの人に目標を持たせることになれば、彼らが自分たちで夢を持って国づくりをしていくと思います。そのときこそ日本が発展途上国に対する役割を果たしたと言えるのではないのでしょうか。

ベトナム・カンボジアスタディーツアー

近畿大学文芸学部 1回

この12日間は毎日が驚きの連続で本当に充実していました。私は以前からボランティアに興味があり、大学の長期休暇を利用して参加しようと考えていました。しかし、ボランティアに挑戦したいという気持ちと同じくらい不安な気持ちもあり悩んでいた時にこのスタディーツアーを見つけました。私は発展途上国の現状を自分の目で直接見て、理解を深め、自分に何が出来るのかを見つけることが課題でした。実際に行ってみると、目を覆いたくなるような光景を目の当たりにしたり、胸が張り裂けそうな思いもしました。しかしこういった気持ちは旅行やただの語学留学では感じる事が出来ないと思います。私自身、このスタディーツアーに参加する前と後では、考え方がかなり変わりました。日本に生まれ何不自由なく生きてきて、自分がどれだけ恵まれているのか知りませんでした。しかし、日本でこうやって生きていることへの感謝の気持ちはもちろん、何か小さなことでもいいから自分が出来る支援をやってみたいと思いました。また、私のように日本にいる人々全員がボランティアに興味があるわけではありません。なので親や友達などといった身の回りにいる人々を巻き込んで少しでも多くの人に発展途上国の現状のことや支援の必要さを伝えたいと思いました。

このスタディーツアーの他の参加者と行ったディスカッションからも刺激を受けました。同じものを見ていても意見や考え方が全く違って、意見が衝突することもありました。日本にいたらこんな経験はできませんでした。物事を一つの面だけを見るのではなく、いろいろな角度から物事を見る事が出来る人間になりたいです。

カンボジア・ベトナムスタディツアー

近畿大学文芸学部 2 回生

私はゼミで国際ボランティア・国際協力を学んでいるのと、海外へ行き、勉強をし、自分の視野を広げたいと思い、このツアーに参加させていただきました。

初めての海外ということもあり本当に驚きの連続で、カンボジアの現状や歴史だけでなく、日本には分からないようなことをたくさん学びました。私がカンボジアに来る前、親や友人、たくさんの人に「そんなところ行くん？大丈夫なん？気付けや。」と言われてました。私も正直最初は怖かったです。“カンボジアは日本より貧乏、だから日本の方が幸せ。地雷もあるし、いつ死ぬかわからない。”カンボジアを知らない日本人はこんなイメージがあるのだと思います。けれど私が実際見て、知って、感じたことは、そのイメージを覆しました。確かに地雷はまだあるし、ストリートチルドレンや物乞い、日本では考えられないこともたくさんありましたが、カンボジアの人たちは明るく、優しく、笑顔がきらきらしていて、出会った人達はみんな素敵でした。みんな毎日を一生懸命に生きているからだと思います。裕福な生活はできなくても幸せで、本当に笑顔な人が多くて、精神が豊かで心に余裕があるのだと思いました。

特に印象に残っている日本語学校では、みんな勉強熱心で、学校に通えることにありがたみを感じているようでした。日本では学校に通える人がほとんどで、それがあたりまえで、そのあたりまえが学校に通えるという感謝を見えなくさせているのだと感じました。

この12日間のスタディツアーで実際に見て、知って、感じたもの、そして出会った人々は本当に一生の宝物です。一緒に参加したみんなと同じものを見て、経験し、ディスカッションを通し、意見や考えを言い、今自分たちにできることは何なのかと真剣に悩みました。この気持ちをいつか忘れてしまうのがすごく怖いのです。私はカンボジアで感じたこの気持ちを周りの人に伝えたいです。そしてカンボジアの人たちのように今を頑張って生きたいです。本当にこのツアーに参加できてよかったです。

インターンシップを経て
神戸大学経済学部二年生

私がインターンシップを通して学んだことは、価値観の多様性です。

12 日間のインターンの中で、教育・歴史・医療・経済等、様々な分野を見学し、自身の疑問を直接ぶつけることができました。二つの事例を挙げます。

一つは日本語学校です。日本語学校の生徒は勉強を必死でしていました。私たち日本人が勉強の時間量で負けているとは思いません。しかし、彼らと私との差は間違いなく存在していました。この差はなんだろうか。自問自答して出た答えは、彼らは学ぶことに生死がかかっているということです。職を得るため、商売のツールとして直接的に結びついているのです。僕たち日本人で生活のために学んでいる人はどれだけいるのだろうか。カンボジアの日本語学校で見た生徒たちは、生きるために学ぶ力強さがみなぎっていた。

二つ目トゥールスレン収容所、キリングフィールドです。トゥールスレン収容所、キリングフィールドでは、ポルポト政権下の虐殺について考えました。当時 200 万人以上の人間が殺されました。彼ら 1 人 1 人に夢がありました。やり残したこともありました。生きることを切望していました。200 万人の中の 1 人ではなく、1 人の人間の生がありました。施設を見学中、この事実を受け止めることができませんでした。国民が力を合わせて抵抗出来なかったのか。世界中の国々はどうして悲鳴をあげるカンボジア国民を助けなかったのか。全ての人間が平和を望んでいるにもかかわらず、歴史的に世界各国で大量虐殺や戦争がたびたび行われている。人それぞれ正義とは何かということがことなり、ある人の正義がある人の悪であるかもしれない。大切な“分かち合う”ということです。価値観の違いで善悪を決めるのではなく、互いに認め合うことが必要なのかなと考えました。この問題についてはまだまだ考えていかないといけません。

日本語学校とトゥールスレン収容所、キリングフィールドを挙げたのは、日本で感じたことのない衝撃を受けたからです。

日本に生まれ、日本で育つ我々にはなにも考えずともルールはひかれています。気付けば小学校中学校を卒業している。学べる幸せなんて考えたことなかった。学べる幸せを感じる状況にいたことがない。家の周りを歩けば本屋がある。それが私たちのフツウ。常識というものは外の世界を見て相対化することでしかわからない。小学生の頃、転校してきた関東人と話すまで自分の関西弁に気付かなかった。それと同じことです。

自分を知るためには他者を知ること。考えているだけではわからない世界がある。ベトナム・カンボジアへ行き私自身新しいものに触れた。そこで感じて得たものを別物として心にとめるのではなく、しっかり共存させようと思う。対立する価値観を潰すことで己を正当化するのではなく、思いやりを持って新たなものを受け入れたい。

この研修に参加することで学んだことは今後の自分の人生に活かされるに違いない。このインターンシップに参加して本当によかったです。

ベトナム・カンボジアでの 12 日間を終えて
大阪市立大学経済学部 1 回

私はこのインターンシップで、初めて発展途上国と言われている国を自分の目で見るという体験をしました。街並み、垣間見える現地の人々の暮らし、何もかもが新鮮で刺激的でした。着ている服がボロボロでも無邪気に笑う子どもたちや、痩せた兄弟を抱っこしながら何ともいえない表情でこちらを見る子、道路で物を売り歩く子など、少し周りを見るだけでたくさんの現状を見ることができました。

今までどこか他人事のように発展途上国のことを捉えていたと思います。病院に行けない、学校に行けない、そのような現状があることを薄い知識でだけ理解して、日本という国に生まれた自分は将来、発展途上国の人と関わりを持つことなんてないだろうし、かわいそうだなという思いしか持てませんでした。でも今回このツアーに参加して、発展途上国の人のために自分は何ができるのだろう、どう役に立てるのだろうという思いが出てきました。そう考えた一番の理由は日本語学校の生徒をはじめ、現地の人と交流するなかで、自分の普段住んでいる環境や学ぶことに対する姿勢について考えさせられ、こんないろいろな事を勉強できる環境にいるのであればそれを還元できる人になりたいと思ったからです。日本語学校の生徒は将来の夢に向かって毎日必死に勉強しており、日本への興味も強く、本当にキラキラしていました。「私は日本語と経営について勉強しています。将来は日本人と一緒に働きたいです。」そう話す同世代の学生の姿を見て、私もそうやって胸を張って言えるようになりたいと思いました。

どのように支援をすれば、その人達のためになるのか、それを考えるときに絶対に必要なのが価値観の違いを理解することだということも学びました。普段恵まれた生活を送っている私たちとカンボジアの人たち、何が幸せで何が不幸だと思うのかはそれぞれ違うということや、私たちからすれば不便な生活に思えても本人たちはその生活に満足していることがあるということ、それを理解するところから支援は始まるのだと思います。今回孤児院などへの訪問がありましたが、募金などはできても、私たちがあのように訪問することは何か子供たちのためになっているのかなど思ったりもしました。そう感じたことで、本当に役に立つ支援の形についても深く考えました。

また、このインターンシップでのディスカッションも私の中で多くの気付きの原因になりました。実際に現地を見て、みんなで意見を交わし、自分が思いつかなかった考え方や、反対の意見を聞くことでも、とても刺激を受けました。そうやってたくさん考えるための基礎となる知識が自分にはまだまだ足りないことを痛感し、そこでも勉強に対する意欲を掻き立てられました。物事をいろんな方向から見るのが苦手な私も、ディスカッションを通して少しずつ自然に違う考えを取り込もうとしていました。このことは価値観の違いを理解するのにつながると思います。私は戦争の影響が今の時代の何の罪もない子供たちにまで及んでいることも事前学習をするまで知らなかったし、地雷撤去に関する二面性な

ど初めて知ることがたくさんありました。同時にカンボジアのことだけでなく、日本の政策や経済発展の経緯についても無知なことがたくさんあると気付かされました。こうやって情けなくなった気持ちを忘れないで、インターンシップを通じて興味を持った分野について勉強したいと思います。そして自分の将来について考えてできることを探したいです。このインターンシップでの出会いは自分にとって本当に大きなものになりました。意欲的な仲間に出会って、発展途上国でたくさんのエネルギーを感じ、学んで考えた 12 日間は毎日が充実していました。これを良いスタートにできるかは自分次第なので、カンボジアで感じた気持ちを忘れずに、もっと知識をつけて社会に貢献できる人になりたいです。

12日間を通して得たもの

奈良県立大学 地域創造学部 1年

私がこのインターンシップに参加しようと思ったわけは、テレビなどで取り上げられている発展途上国の現状を実際に自分の目で見てみたいと思ったからだ。カンボジアに行くまでは、カンボジアの道路は舗装されておらず、でこぼこ道なのかなと思っていた。けれど実際に行ってみると、田舎の方では街灯や信号もなくでこぼこ道だったが、プノンペンやシェムリアップでは道路も舗装されていて、自分の抱いていたイメージとは違うなと思った。

12日間のインターンシップを通して特に印象的だったことは、プノンペンで胡椒のお店を営んでいる日本人の人が言っていた次の言葉だ。『カンボジアは日本の募金などで学校はあっても、先生がいないから結局機能していない。』日本では発展途上国に学校建設をするために募金がおこなわれていたりする。実際私が通っていた高校やバイト先では、その募金活動がおこなわれていた。しかしカンボジアの現状として、校舎も足りなければ、教師の数も足りなかったというわけだ。今までは学校が建設されれば、発展途上国の子ども達は学校に通うことができ、教育を受けられるものだと信じて疑わなかった。しかし、いくら学校があっても、教師の数が不足していると、子ども達は教育を受けられない。様々な研修先を訪問している中で何人かの人が、カンボジアの教師の給料は安いと言っていた。だから教師になりたい人も少ないし、教師をしても他の職業と掛け持ちをしている人が多いと言っていた。学校の数に加え、教師の数も不足しているため、学校は午前と午後の2部制の学校がほとんどで、日本の子どものように1日中授業を受けることができないとも言っていた。プノンペンで日本人の人が言っていたこの言葉を聞いた時、今までこれらの募金は良いものだと思っていたが、はたして発展途上国の人々は本当に学校建設を望んでいるのか、もしかすると、教師の給料が安くて教師の数が不足しているという根本的な問題には目を向けず、校舎さえあれば学校は機能するものにちがいないという日本の考え方を発展途上国に押し付けていただけなのではないだろうか、とも感じた。

また、私はこのインターンシップに参加したメンバーとのディスカッションも印象に残っている。毎回簡単に答えの出るテーマではなく行き詰ったりもしたが、いろいろな考え方に触れることができ、良かったと思っている。機会があれば、このメンバーでまたディスカッションをしたい。

最後に、このインターンシップに参加して本当に良かったと思っている。カンボジアの現状を見聞きできたことはもちろん、自分の価値観を今まで相手に押し付けていたのではないだろうかと考えさせられる12日間でもあった。またこのメンバーに出会うこともできたので、参加して良かった。

インターンシップの参加を終えて
奈良大学文学部3回

中学生の頃、家族旅行でカンボジアに行きました。今回はスタディツアーという形で参加しました。教育分野・歴史分野、他に様々な分野から学ぶことができました。私ははじめ教育分野とアンコールワットに関心がありインターンシップに参加することにしました。

私は教員を目指していて、教育分野には非常に関心がありました。

日本語学校では、必死に勉強する生徒の姿は印象に残っています。生徒と話をするとき、こちらが英語を使って会話すると思っていました。私は語学が優れていなくて、会話できるか不安でした。しかし、教室に入ると、生徒は元気良く大きな声で「こんにちは」と挨拶してくれました。必死に勉強する姿勢や表情は忘れることはありません。また孤児院では、最初子どもたちと打ち解けるか不安でした。寄っても避けられるのではないかと、嫌われるのではないかと不安でした。でも子どもたちから寄り添ってきて、すぐに打ち解けました。風船で遊んだり、走り回ったりして、小学生以来たくさん子どもたちと遊びました。子どもたちの笑顔を見てみると、私も自然と笑顔になれました。

今回のインターンシップで一番衝撃を受けたのは、地雷撤去作業の見学です。最初インターンシップの計画にはなかったのですが、急遽見学へ行くことができるようになりました。トラックで移動中、辺りをみると木が切られていたり、地面が黒かったりと地雷の撤去を終えた痕跡がいたるところにありました。私たちが来る10分前に見つかった地雷や、1つ地雷があればすぐ近くに2つ目の地雷があり、「危険」という看板をよく見かけました。地雷を爆破させるのも見学しました。音がすごくて迫力がありましたが、穴を見ると予想よりも小さくて驚きました。

この12日間は、とても短く感じました。1日1日の研修は奥深く、ディスカッションでは多くのことを考えさせられました。カンボジアの人々をみていると、毎日を必死に生きている、今を必死に生きているのを感じました。最初にこのインターンシップに参加した理由は簡単だったけれど、インターンシップを終えた今は自分にとって大きな刺激になりました。私はボランティアサークルに所属しています。今回のインターンシップで学んだことをメンバーに伝えて、サークルの活動を大きくしたいなと思います。カンボジアの人々のように、毎日を必死に生きたいと思います。今まで私は何をしてきたか考えることも大切だけど、これから何をしていくかを考えていこうと思います。自分自身から動いていこうと思います。本当なら、地雷撤去作業の見学は研修先に含まれていなかったけど、引率の2人が頑張ってくれてうれしかったです。貴重な体験ができました。12日間と短かったけど、インターンシップ参加できてよかったです。

「駆け抜けた12日間」

立命館大学国際関係学部3回生

私にとってこの12日間は、がむしゃらに駆け抜けた日々だったと言えます。12日間でどれだけ自分を成長させることが出来るのかを考えながら毎日行動しました。現地でしか聞けないこと感じられないことをたくさん吸収して、日本に帰ってアウトプットしたいという思いで挑みました。初めて訪れる途上国、東南アジアにワクワクしていました。

研修に行く前、大学の授業で途上国の政治や開発政策の授業を受けていたので、知識はある程度持っているつもりでした。しかし、実際にベトナム、カンボジアに来てみて、戦争が残した負の遺産と、貧困問題の根深さに衝撃を受け、机上で学ぶだけでは本質を知ることが出来ず、現地に行かなければわからないことが数多くあることに気づかされました。地雷問題について、レポートを書き、知ったつもりになっていましたが、実際に地雷撤去作業現場を見学したときに聞いた地雷の爆発音と衝撃が耳に残っていて今も忘れることが出来ません。

ただ施設を見学して一日が終わるのではなく、日記を書くことでその日の研修先で感じた思いを文章化し、仲間とのディスカッションでその意見を人に伝えることが出来る機会があったのでその日感じたことを振り返ることが出来ました。一日一日の密度が濃く、メモを取るのに精一杯で、自分の中で整理しきれなかったこともあります。帰国した今、知識不足だと感じたことは調べ、消化しきれずにあるものを自分の中で問い直したいと思います。

どの研修先でも刺激を受け、新しい発見や、考えが変わることの連続でした。その中でも一番印象に残っている研修先は、ゴミ山です。人々が貧困から抜け出す方法は教育である、という言葉をよく聞きます。自分もゴミ山に行くまでその通りだと信じていました。しかし、学校や教師を増やすよりも前に、ゴミ山の子どもたちが学校に通える、教育を受けられる「環境」をつくる必要があると思いました。ゴミ山に代わる仕事とは何か、ゴミ山で家族と過ごす方が幸せだと思う子どもを学校に行かせることがその子にとってベストであるのか、問いは尽きません。

私は研修を通して、自己の成長への第一歩を踏み出せたと思っています。物事を深く考えること、問いを見つけること、受け身の姿勢を止め行動的になることを心掛けて12日間を過ごしました。日本に帰ってからも、このような行動の癖は身に付きつつあると感じています。

この研修を知ったきっかけは、大学の他学部の掲示板で見かけた、という偶然の縁です。研修中、孤児院や農村で出会った人懐っこい子どもたちや勉強熱心な日本語学校の学生、親切なガイドさんといった様々な縁に恵まれました。もちろん研修を共に過ごした仲間、引率の方との縁にも感謝しています。この研修で出会えた縁を大切に、これからもカンボジアとベトナムとの新たな縁と築いていきたいと思っています。

インターンシップに参加して

龍谷大学文学部 2回

私は大学でポスターを見てアンコールワットと平和分野の研修内容に魅力を感じたことがきっかけでこのインターンシップに参加しました。アンコールワットはもちろん素敵でしたがそれ以上に本当にたくさんのご縁を得ることができました。それと同時に自分が何も知らなかったということに気づかされました。今まで実感したことのないような出来事をこのインターンシップで自分の身をもって実感することができました。

毎日ゴミを集めて1日1ドルほどで暮らすゴミ山の人たちや HIV 病棟の患者さん、枯葉剤の影響を受けた TuDu 病院のドクさんや奇形児の人たち、地雷や収容所など日本では決して見聞きすることのできないことでどれもこれも目にするものすべてが新鮮で衝撃的でした。そして現地のいろいろな人たちの話を聞いて今まで自分はどうか生きてきたらどうかと考えさせられました。毎日今日を生きようと思って生きてきたかというところではありませんでした。私はただ単に社会や周り流されて生きてきただけだと思っていました。この毎日を当たり前のように生きてきていました。けれどカンボジアやベトナムに行って私が日本で過ごしている日々は決して当たり前ではないのだと気づかされました。みんな一日一日を一生懸命にいきいきと生きていました。その姿はとても輝いて見えました。

また私はこのインターンシップで初めて国外に出て、初めて違う価値観に触れることができました。先進国に住んでいて先進国の世界しか知らなかったもので、正直なところ私は何においても発展していることが全てで、発展している方が絶対に幸せだと思っていました。けれどいろいろな人と出会って話を聞いたり、ディスカッションをしていく中で違う価値観に触れたり、そういう考え方もあるのかと知ることができ、一つの価値基準で物事を考えてはならないと思いました。

私がこのインターンシップに参加してなによりも一番印象に残っているのは人との出会いです。孤児院の子供たちの元気にはしゃぐ姿や TAYAMA 日本語学校、山本日本語学校の学生さんのいきいきとした笑顔は忘れることができません。孤児院の子供たちはみんな家が貧しかったり、親を亡くしていたりと小さくして辛い境遇にあるはずなのにそれを感じさせないほど元気で逆にこちらが元気をもらったほどでした。子供の笑顔というのは何にも代えがたい宝だと思えました。日本語学校の学生さんはとても明るく元気に私たちを迎えてくれました。どの学生さんも日本語がとても上手なのにまだ日本語を学び始めて2か月しか経っていないと聞いたときは本当に驚きました。みんな勉強熱心で、ある学生さんは寝るまでずっと勉強して、次の日また朝早く起きて学校に行くまで勉強していると聞きました。学ぶ意識の高さ、学習意欲の高さが私とは全く違うと思えました。きっと学ぶことに対して本当に喜びを感じているのだと思います。日本の歌も歌ってくれて、いつか日本に行きたいと言ってきて本当に日本が好きなのだ、日本人としてとても嬉しくなりました。いつかぜひ日本に来てほしいです。

私たちの勉強のために話を聞かせてくださったいろいろな研修先の方たちやベトナムのガイドのユイさん、カンボジアのガイドのスメイさん、そして何よりもこのインターンシップに参加したみんなと引率の二人に出会えて良かったです。いろんな方々のおかげで私は想像以上のことを経験することができ、思っていたよりもはるかに充実した12日間を過ごすことができました。

このインターンシップでは旅行では決して経験のできないことをたくさん経験でき、多くを知ることができました。はっきり言って、これまでの私は全くと言っていいほど海外に興味がなく、東南アジアはおろか、自分が海外に行くことはないと思っていました。なので東南アジアのことを何も知らないまま参加しました。しかし単純な動機から参加したことでほんの一部にしかすぎませんが良いことも悪いことも知って、東南アジアや発展途上国のことをもっと知りたいと思うようになりました。また今までは全くなかった自分の将来に海外という選択肢も考えるようになりました。そして自分の今までの生き方を顧みるきっかけにもなりました。周りに流されて、この毎日を当たり前だと思っただけだと思っていました。日本に戻ってきて今の私にできること、すべきことは何かと考えたとき、日々感謝を忘れず、ベトナムやカンボジアの人たちのように毎日を一生懸命生きることだと思いました。高い学費を払ってもらって大学に通わせてもらっているのですからまずは学業が一番に頑張ろうと思います。またカンボジアやベトナムについてもっと知りたいと思ったので調べて知識を深めたいと思います。そして私が一番身近に世界に力になれることは募金や寄付だと思うのでそういうところから国際協力していきたいです。

この12日間は一生忘れることのできない12日間になり、参加して本当に良かったと思っています。インターンシップに参加できたこと、そして出会えた皆さんに心から感謝しています。ありがとうございました。

成長への一里塚

龍谷大学文学部 2 回

日本に帰国した今、インターンシップでの1コマ1コマが走馬灯のように頭の中を駆け巡る。去年の12月にこの研修の説明会に参加した当初の私の思いは次のようなものだった。中学生のころから「青年海外協力隊」、「ボランティア」といったワードに魅せられてきた自分。一方でそのような活動とは無縁だった自分。このインターンシップを逃す手はないと。活動スタイルは二の次だ。

大学1年生の時に葉田幸太『僕たちは世界を変えることができない』を読んだ。カンボジアに学校を建てようと奮起する学生たちの姿が描かれていた。学校設立というアクションを起こす彼らの姿は偉大なるものに映った果たして自分は国内、外で何か人のために尽力してきたか。些細なことをカウントしてもよいのならば、掃除、募金などが自己の足跡だといえようか。だが、どこか「しこり」の残る日々を送っていた。

カンボジアに足を踏み入れた際のビザの審査員の険しい表情が臉に焼き付いて離れない。他国からの異質な存在を拒むかのようなあの目つき。不正入国の防止はモットーとしてあるのだろうが、私はカンボジアの人、治安に不安を抱いた。いとも簡単に。

第一印象は恐ろしい。研修を通して思うのはカンボジアの方は人と人の距離が近く、笑顔がチャーミングだということ。

孤児院、日本語学校での研修が自己のメモリーの中で鮮烈に揺さぶりをかけてくる。孤児院では幼い子だからかもしれないが、あれほどまでに人に懐くものかと感慨を抱いた。私は彼らが可愛らしくて仕方がなく、おんぶ、抱っこなど肌を通して時を共有した。言葉の壁は皆目、問題とならなかった。彼らは澄んだ瞳で私たちを見つめる。私たちは珍しい訪問者だったのかもしれない。笑顔はこんなにもエネルギーを注入してくれるのだと彼らが教えてくれた。

バスに乗り込み、彼らが後ろから駆けてくる様子を見た時、胸にせまるものがあった。私は彼らの「普段の」姿を知らない。人肌が恋しくて無邪気にまとわりついてきてくれたのかもしれないと考えると、彼らに宿るバックグラウンドを垣間見た気がした。彼らが自己の生い立ちをどれ程まで理解しているのか分からない。人は時として生きているだけで誰かを救うことがある。そんなことを切実に感じた、彼らの笑顔に。

日本語学校では部活動の雰囲気ながら、皆がエネルギーギッシュだった。自分の中にある熱い想いを体現していくことの気高さよ。自分が勉学に励む上での羅針盤を頂戴した。

モノがなかったり、インフラが整備されていなくても生き抜く術を持っているカンボジアの方々。そもそも、カタチあるものを追求するばかりが正解ではないと悟った。「毎日を生きたために生きてきたか」、クラタペッパーでの問いかけ。自身を持って「イエス」と答えられるように精進を。稀有な体験を数多させていただき感謝している。

インターンシップに参加して

関西出発 龍谷大学文学部 2 回生

私がこのインターシップツアーでとても印象に残っているのはカンボジアの方の笑顔です。

私はもともとこのインターンシップに参加した一番の理由はカンボジアの歴史に興味を持っていたからで、本やネットでよく見かける虐殺のことやその前は東洋のパリとプノンペンがいわれた程栄えていたということ、アンコール遺跡群などをこの目で見て知りたいたいと思い参加していました。実際現地に行ってとても濃くて充実した十二日間を過ごさせていただきました。この期間私はたくさんもう言葉では言い表せないような感情や考え、疑問を抱かされました。

孤児院や農村、ゴミ山、病院施設など日本で暮らしてきた私から見てとても考えられないような環境であるのに、彼らの笑顔はとてつもなくエネルギーがあって・・・そしてその環境下では実現が難しいけど大きな夢があって・・・。彼らを見るたびに自分の底の浅さが見えた気がして今まで何をできていたんだろう、と思いました。カンボジアのこともふれあう機会がありましたが、彼らの何人かに先生になりたいんだ！とはにかんだ笑顔でいわれ、すごいね、と返している傍らで彼らを取り巻く生活環境では難しいのではないかと考える自分にすごく苛立ちました。

では資金援助すればいいのではないか、でもその考えは三日目の KURATA ペッパーのオーナー倉田さんの話やプノンペンなどの都市と農村部の落差で、ハード面だけでなくソフト面も大切です。だけど、どこまでその国を支えたらいいんだろう。考えれば考えるだけモヤモヤしてきて・・・。日本に帰ってからもそれは変わらなくて、ずっとモヤモヤしたままこのレポートもかいています。

このスタディーツアーで得たもの。それは人の輪だと思います。

日本に帰ってふと携帯電話をみると、LINE のタイムラインが更新されていました。見てみるとそれは日本語学校で知り合った人でした。その人は私と撮った写真を載せて「恋しい」と一言だけ添えていました。とても感動しました。たった半日しか一緒にいなかった外国人にこんな言葉をかけてくれるなんて。その人とはその後も LINE や Facebook などやりとりしています。

今思いかえってみると、カンボジアの人はとても気さくで、温かい笑顔でした。王宮前の公園で座っていたら僧侶の人が話しかけてきてくれたり、トユクトユクの運転手さんもすごく気さくな優しい人でした。カフェの店員さんは英語や日本語で一生懸命話してくれて、彼女の来歴やなんでここで働いているのか、給料はいくらだ、とか教えてくれました。ガイドのスメイさんは言うまでもなく素敵な人で、いろんな事を教えてくれました。彼らはとても表情が豊かで、楽しそうにしていました。それは彼らが精一杯一日を生きているからだと思います。私も彼らを見習って一日を生きていきたいと思います。そうすれば彼らのような素敵な笑顔になれるとおもうから。

2014年春 インターンシップ

東京外国語大学 院生1年

2014年の春、友達の二人とカンボジア、ベトナムインターンシップに参加させていただいた。ただの12日間だが、すごく充実した研修だった。

このインターンシップに参加したきっかけは国際協力を専門として勉強している私は東南アジアの教育開発について強い興味を持っていることである。そのうえで、私の故郷はベトナムの隣である中国、広西チワン族自治区であり、生活習慣と文化などがベトナムと似ていて、ベトナムの現状を知りたかったからである。

現地でいろいろなところに見学しに行った。そこで出会った人々の話を聞いたり、考えたりした。一番印象に残っているのはタヤマ日本語学校の生徒たちの笑顔であった。彼らは日本のことが好きで日本語を学ぶことへの熱意にとっても驚かされた。彼らの夢を聞いて、彼らの笑顔を見て、なんとなくカンボジアこの国の未来を見えることが感じた。

しかし、学校に行ける子供がいるし、行けない子供もいる。ゴミ山の見学の時、そちらに生まれた子供たちの遊ぶ姿を見て、いろいろなことを考えた。こんな環境の中で生まれ、学校に行けても、差別される可能性もあるだろう。そちらの子供の将来はどうなるだろうと考えた。また、現在のカンボジアにとって、ゴミ山の環境を改善する能力がないから、もしほかの国から協力をもらえばと思う。

また、農村と経済特区の見学を通じて、もっとカンボジアこの国のことを了解した。経済特区の設立また都市部のインフラの整備につれて、これからのカンボジアは30年前の中国と同じ、経済がどんどん発展していくが、その中でいろいろな問題もあると思う。まず、農村部と都市部の格差の拡大する恐れがあるだろう。また、いろいろな外国の企業と人材がカンボジアに入って、地元の企業はどのように発展できるか。そして、教育を受けるカンボジア人は少ないといえるから、外国の人材がたくさん入ると、地元の人の仕事のチャンスも少なくなるだろう。などの疑問点を持っている。

それらのことについて、夜のディスカッションのとき、チームの皆と検討した。面白いところは、同じものを見たのに、いろいろな考え方が出た。私も皆のご意見と考え方を参考し、勉強になった。ディスカッションの時間は本当に楽しくて大切な時間だった。

日本に帰ってきて、自分の勉強不足のことも反省しながら、これから、自分は国際協力に何か出来るかと考えている。また、自分は将来、何かをやりたいともう一度考え直した。

ベトナム・カンボジア研修に12日間参加させていただきました。私は海外が初めてでした。ベトナム・カンボジアと聞くとまず最初に「地雷・危ない・ちゃんと帰ってこれるか?」というイメージしか私の中には浮かびませんでした。でもそれが間違いだということに気づきました。ベトナムはとても交通が発達していて街並みもとても綺麗でした。カンボジアの首都プノンペンも道路を見ていると高級車がたくさん走っていました。カンボジアのトイレには紙がないということは少し驚きました。日本では紙があることなんて当たり前だということになるのかもしれませんがこれは彼らにとって日常であってこれも文化・価値観の違いなんだなと実感しました。向こうで過ごして数日後には危ないなどという意識は全く持たなくなっていました。

観光省、戦争博物館、病院など現地の方からも貴重なお話をたくさんいただきました。向こうで交流・見学・学習を通して日本とは違う文化・価値観の違いを学ばせていただきました。私が一番心に残っているのはカンボジアの学生さんと孤児院の子供たちの笑顔です。孤児院の子供たちと触れ合って一緒に遊んだりご飯を作ったりしました。子供たちに持って行った鉛筆と消しゴムはとても喜ばれてあつという間に無くなりました。別れるときに抱きついてこられたのは正直涙が出そうになりました。日本語学校の学生さんが日本語を短期間で覚えてしまうというのは驚きました。上手な日本語でたくさんの質問を聞かれて彼らは本当に日本が好きでだからこそこまで懸命に学んでいるんだなというのが伝わってきました。そして笑顔がとても素敵でした。どんなに貧しくてもとても幸せそう。彼らは今の日本にはないものを持っているんだなと思います。

カンボジアの人たちは一日に数ドルで生活している人たちがたくさんいるということを知って、貧しいからこそお互いに助け合ったり人のために行動することができるのかなと私は思います。カンボジアではお金の大切さも改めて考えさせてもらいました。

この12日間にカンボジアでいろんな方と出会いました。違う大学の人たちとも交流ができて、お互いの意見交換などとても貴重な経験ができました。みんないろんな考えを持っていていろんな視点から物事をとらえたり考えさせられたりしました。一緒に同行していただいたガイドさんにも感謝しています。お別れは辛かったです。引率してくれた若江さんには最後までお世話になりました。とても素晴らしい研修に感謝です。本当にありがとうございました。

Japan Asia Promotion Foundation

JAPF 春期短期インターンシップ 関東出発

国際基督教大学教養学部1年

「研修を終えて」

私は前々から東南アジアに興味を持っており、また、中でも特にカンボジアという国に対しては特別な憧れと関心を持っていたため参加を決めました。「東洋のパリ」とも呼ばれるほどの美しい佇まいの首都プノンペン、世界的にも名高いアンコール・ワットなどの古代の遺跡群に、南アジア独特の香辛料が効き美味しいと有名な郷土料理…。私は大学で、カンボジアと同じく東南アジア諸国に属するインドネシアについて少しでも勉強してきましたが、同時に、カンボジアへの憧れは日増しに強くなっていきました。島嶼部と半島部では同じ東南アジアでも趣がかなり異なることを授業などで学んでいましたし、何より国力もインドネシアとは大きく差があるカンボジア。魅力あふれる国だが、貧しい。「内戦」「ポル・ポト」「クメール・ルージュ」、「地雷」、「貧困」…。カンボジアのイメージを級友達に尋ねれば帰ってくるのはそんな言葉ばかりでした。もちろん、間違っているとは思えません。ですが、内戦の終結からかなりの月日が経った今、復興の途上にあるというカンボジアをこの目で見たいと強く思いました。春休みのこの時期ならばカンボジアであっても旅行会社で手ごろな価格のツアーなども組まれていたでしょうが、JAPF というアジアにのみ特化した財団で、学生の日線目線で研修内容を決めていることも、参加を決めた理由の一つです。カンボジアの光と影、どちらも見てみたかったためです。特に私の興味を惹いた研修先は、実はエイズ病院でした。

私はかつて、医師を目指していました。幼少時に病気がちだったこともあります。何より感染症に興味があったためです。その中でも世界三大感染症に含まれるエイズについては昔も今もすごく関心を寄せてきました。その感染経路の特殊さから、社会的に根が深い病気であるエイズは、カンボジアで大きな問題となっていることは有名です。カンボジアは東南アジア諸国の中でも一位、二位を争うほどのエイズ大国なのです。安井奈津希さんというフォト・ジャーナリストの方によるルポルタージュ、「あそこにエイズの村がある」を読んでからはカンボジアとエイズ、この二つの概念を組み合わせ更に関心を持つようになりました。でも、カンボジアをこのようなイメージで捉えるばかりではいけない、ということもまた、研修中に気づかされた大切なことでした。エイズについて調べ、エイズ病院を訪問し、帰りに私が感じたことは、捉えどころのない虚しさのようなものです。興味があると言っておきながら、日本に一度帰ってしまえば私は何もしないのかも知れない、とも思いました。でも何かしらの意味があったとは感じています。恥ずかしながら先進国中唯一、新規の HIV 感染者が毎年一定の割合で増加し続けている我が国、日本。そこからやってきて、カンボジアのエイズの現状を目に焼き付けたことは、自分でも良い経験にな

ったと感じています。ですが、これで終わりにするのではなく、新たな「はじまり」にしたいと思っています。エイズ病院に限らず、カンボジア、そしてベトナムの、ここには書ききれなかった他の研修先で見ることができた全てのもの、一緒に旅をした日本人の仲間も含め今回出会うことができた全ての人達が、何らかの形で私のこれからは、良い影響と刺激を与えて下さったと考えています。

本当に有意義で濃い12日間をありがとうございました。私自身の「アジアを見る目」が少しでも深く多角的なものになっていたらと願うばかりです。最後に私がこの研修の締めくくりに際して、今の自分に贈るのに最も相応しいと思う言葉を聖書より引用し、筆を置かせていただきます。

イエスは言われた。学んだこと、受けたこと、聞いたこと、見たことを実行しなさい。そうすれば平和の神はあなたがたと共におられます。

「新約聖書 フィリピの信徒への手紙」第4章9節より

ベトナム・カンボジアを訪れて

上越教育大学大学院学校教育研究科 M1

今回の研修で訪問するまで、ベトナムやカンボジアについては無知に近かった。日常生活で意識することはほとんどなく、両国は私には無関係なものだと思っていた。しかし、政治や外交、企業活動ではアジアの動向は注目されている。実際に数多くの企業が現地で商品製造などを行っており、例えば、味の素やユニクロなどの進出が挙げられ、プノンペン経済特区には味の素の工場があるのを確認した。他にも様々な関係があるにも関わらず、日本との関係性や国際協力における取り組みについてはほとんど知らず、故にこの研修で見えるものはすべて新鮮で毎日が学びの連続でした。また研修で学んだことや感じたことを同じ大学生と意見を交換することができ、考えがさらに深まり、自分の世界観、価値観に強い影響をもたらしてくれた。

私は現地の子どもたちの様子や置かれている環境、また教育の在り方について、学べたことが大きな収穫になった。日本語学校の学生の熱意や孤児院の子どもたちの笑顔には感銘を受けた。短い研修時間だったので、もしかすると表面的なものだったかもしれない。しかし、カンボジアを訪れるまで、あまり良い印象を持っていなかったため、それは想定していなかったことであった。学生の熱意はとても感じられ、日本語学校の学生のレベルを考えれば、とても努力しているだろうと感じた。孤児院の場合は日本と比較すれば、ハード面は決して良くないと思うが、限られた環境の中、スタッフの愛情によって、生活している様子が見て取れた。

カンボジアの場合は教育に対する行政の取組みがまだまだ良くないと感じた。教育に充てる財源が少なく、自国で学校の教員や孤児院のスタッフを養成しにくく、まだまだ外国からの援助に頼っているのが実情らしい。また、高校や大学を卒業していない教員が沢山いることや教員の給料面、子どもの就学率の実態などが課題として挙げられると思う。

これらの課題を考えたときに、カンボジアの歴史や文化を考慮したうえで、さらに経済面や環境（インフラ）面も当然、配慮する必要があるだろう。大学院で研究しているときは、専ら日本の学校ばかり意識しており、あまり外界との関係性を強く意識してこなかったように感じる。日本の基準で測ってみれば、カンボジアの実状はやはり課題ばかりで、それらを考慮したときに決して、単一的に物事を考えてはいけないと強く感じた。それは開発教育のなかでも十分言えると思う。

国際協力や開発教育について考えるうえで大切なことがあると感じた。私はカンボジアの歴史や経済力を一見して、良くないと決めつけてしまった。しかし、実際には良い面も当然あり、発展途上国だから、とかそのようなことで国の現状を勝手に判断してはいけないと感じたのである。それは農村地帯などでは自給自足をしながら、ゆっくりと日常を過ごしている人々がいるという現状と都会生活を一括りにし、その現状を日本の基準に合わせて判断し、国際協力などをしてはいけないということである。国際協力や開発教育の場合、

他国からなど様々な視点が必要だと感じた。

最後に、今回の研修では答えがすぐ見つからないような事柄に沢山触れることが出来た。今後、様々な場面において、この研修で生かせることが沢山あるように思えてならない。参加して良かったです。皆さんありがとう。

JAPF 春期インターンシップを終えて
専修大学1年

2月22日～3月5日に行われた、春期インターンシップに参加したことで、自分の中のベトナム・カンボジアに対してのイメージや考え方が少なからず変わりました。

それは、東南アジア全域に対して抱いていた「貧困」というイメージであり、貧困そのものは不幸せなものだろうということです。

事前学習を通じてベトナム・カンボジア共に、急激に経済発展していることを知り、「貧困」をイメージさせる場面を見ることは難しいのではないかと考えていました。しかし、実際に行ってみて感じたのは経済発展をしていく中で、貧富の差がとても広がっているのではないかというものです。国境からブノンペンに行く途中で乗った船で出会ったストリートチルドレンとCMCAの隣にあった豪邸を数日間のうちに見たことでそれを強く感じました。

このインターンでは文化芸術省・観光省という旅行会社や個人の旅行では行けないような場所に行き、カンボジアの今後のビジョンについての話を聞くことができたことはとても貴重な経験になりました。特に自分自身、観光業の職に就きたいと考えていて、観光省で具体的で効果的なプロジェクトを聞き、自国の資源をどのように活用するかという面で自分が日本の観光業について考えていたことが稚拙であったと感ずることができました。

また、孤児院の子供たちや日本語学校の生徒たちとの交流を通して気付いたことはカンボジアの人たちはその笑顔の裏側で、生きることに必死だということです。孤児院では自分たち(お客さん)に対して子供たちは目一杯の笑顔で出迎え、もてなしてくれました。しかしその笑顔の裏には親に捨てられたことから来る人間関係のトラウマのようなものがこの子供たちを突き動かしているのではないかと思う場面もいくつかありました。日本語学校の生徒の中には自分が卒業した後はすぐ仕事を探さなければいけない状況の人もいて、何としても日本語を身に付けようという気迫を感じられました。

そして、HIV病棟やTu Du病院の訪問は人の生死がリアルタイムで進行している現場に立ち会っていることで、自分が何もしてあげられない歯痒さを身に染みて感じたと同時に、日本に帰ってからこの人たちのために自分が最短で最善な行動をするためにはどうすればいいのかを考えさせられる場にもなりました。

2週間の研修中、ほぼ毎日インターン参加者でディスカッションをした中で、最初は自分の考えと他の人の考えが合致することが多く、その議題の方向性において一直線になりがちでした。しかし、回数を重ねるにつれ、お互いに対して賛同だけではなく否定の意見を言い合い、まとめることができなくなることがありました。その時に引率者の方が「まとめられないというまとめ方もあるよ」と言ってくれたことでその議題の「正解」を求め続けていた自分の中で「正解のない答え」という選択肢があることを実感することができ、

ディスカッションをこれからしていく上で非常に有意義なものになりました。

このインターンを通じて学んだことは、ベトナム・カンボジアに行く前に考えていた「貧困＝不幸せ」という図式は研修先で出会った人々にはほとんど当てはまらないのだということです。日本人に比べて、物質的な豊かさはないけれど精神的な豊かさでは勝っているカンボジア人を色眼鏡でみていた自分を恥ずかしく思いました。また、これからの東南アジア諸国に対しての向き合い方を変えてくれた2週間にもなったと思います。

2014年 JAPF 春期短期インターンシップ

— “人” から見えたベトナム・カンボジア —

早稲田大学4年文学部

元々一人で海外に旅行することが趣味だったが、今回の春期休暇は個人旅行では見られない国の側面を見たいと思いこのツアーに参加した。ただし目的地は、行ったことのない国で且つ予算内で収まることを条件に探していたので、ベトナムとカンボジアに特別思い入れがあった訳ではなかった。

ツアーに参加して、印象的だったのは現地で出会った“人”である。本レポートでは、特にカンボジアの人々に焦点を当て述べる。まず、JSTでアンコール遺跡の保全と周辺地域の人材育成を行っているチアさんは、カンボジア内戦で家族を殺され辛酸を嘗めた後に日本へ難民として逃れてきた。日本でも差別や偏見に遭いながら勉強を続け、内戦終了後カンボジアへ帰国しNGOを設立して活動している。見学させていただいたフリースクールでは、英語・日本語・音楽・美術・パソコンなど将来を見据えた内容を教えていた。次に地雷博物館で幸運にも会えたアキラさんは、クメール・ルージュ、ベトナム軍の兵士という経歴を持ちながら、現在無償で地雷を撤去する活動を行っている。かつて、自分が地雷を埋めた兵士としての勤と経験を存分に生かした地雷撤去のノウハウには舌を巻いた。地雷撤去の国家資格を取得するまでは、政府から目をつけられて拘束されることもあったが活動は止めなかったと言う。

チアさんからは、内戦下の強制労働の様子やタイまで3日間歩いて逃れたことを、アキラさんからは自分の村がクメール・ルージュに襲われた様子や、戦況が変化して同胞と戦わざるを得なかった話を聞き、戦争というものを生々しく感じた。ただそうした壮絶な話以上に驚いたのは、当事者である両者が、あくまでも穏やかに話し淡々と自分の活動をこなしていることである。自分の経験を存分に生かし、今自分ができることをやり抜く精神力の強さに感服した。

そして、ガイドさんや日本語学校の生徒も強く印象に残っている。特に最初に訪れたTAYAMA日本語学校は、礼儀や生活スタイルが日本式に叩き込まれていて、何より生徒が授業を受ける熱心さに驚いた。生徒達と話していると将来日本語を使って仕事をするために、日本語を身につけたいという思いをひしひしと感じ、自分の勉学に対する姿勢との差に反省した。実際日本語学校の生徒たちは、3か月から2年という短い学習期間でも、日本人と堂々とコミュニケーションがとれており、学習意欲の真剣さが見て取れた。

上記に述べたようにこのツアーで、自分よりはるかに苛酷な環境で明確な目標を持って努力しているカンボジアの人々に出会った。そこでいかに自分が恵まれた環境にいるのか

を再認識し、勉強したことは自分の為だけでなく、他者に還元すべきだと痛感した。私自身は大学院に進学する予定なので、彼らを見習いまずは学業に打ち込みたい。

また発展途上国の情報は日本でも簡単に知ることができるが、現状がどのようなものか少し実感が持てたのは実際に人と会った時だった。ほんの12日間、外国人としてベトナム・カンボジアの一面を見たに過ぎないが、ある国もしくは他者を理解するための想像力を獲得するきっかけをつかめたと感じている。今後は他の様々な国々を今回培った想像力を用いて、同じように理解していきたいと思っている。

JAPF 春季短期インターシップに参加して 関東出発

私は、友達に誘われてこのスタディツアーに参加しました。海外の子どもたちと関われるということですごく楽しみにしていました。このツアーに参加するにあたって、ベトナム・カンボジアのことを1から調べていくうちに自分が全く知らなかった事実がたくさん出てきて驚愕しました。

でも実際、現地に行ってみると、インターネットで調べていたこととは違うことがたくさんありました。まずカンボジアに到着して思ったことは、「栄えている」そう思いました。カンボジアは、すごいスピードで成長している最中です。でもその反面、町では子どもたちがお金などを求めてきました。それはすごく心が痛くなるものでした。自分には何ができるのか、それは正しいことなのか。

孤児院では、子どもたちのほうから笑顔で寄ってきてくれて遊びもいろいろと教えてくれてすごく楽しいひと時を過ごせました。でもそれは低学年くらいのちいさな子どもたちだけで、大きい子どもたちはあまり笑っていませんでした。それはやはり、現実を知ってしまったからなのかなと思いました。今、笑顔で遊んでいる子どもたちもいずれ現実を知ると、笑顔が消えてしまうのかなと考えるだけで心が苦しくなります。そのために何ができるか考えてはみるけれど、実際に何ができるのかいまだに答えが見つかりません。

カンボジアで仕事をしている日本人の方の話は本当に奥が深くて、いろいろと考えさせられました。日本に住んでいる日本人は、「カンボジアでは井戸が作れないから作らない。だからボランティアが必要だ」と勘違いしています。実際に私もカンボジアに行くまではそう思っていました。だけど実際は、井戸を作らない場所には有害な物質などがでてしまう危険があるために作らないのです。それを知らなかった私のカンボジアに対する考え方は180度変わりました。日本がカンボジアにしているボランティアは、100%ではないけれど余計なお世話なのかなと思いました。

日本語学校の生徒たちはとても元気で、日本の文化をととても理解していて礼儀正しく、そして日本語を勉強する意欲がすごく高くて驚きました。ひとりひとりが勉強できる環境のありがたさを知っているからなのです。日本人は、勉強できることが当たり前だと思っていて、すごい日本人が惨めに思えました。

結局、日本人がカンボジアに出来ることってなんだろうって考えたときに、一方的な支援や日本に利益の入ることをすればそれは迷惑でしかない。だったら、カンボジアが助けを求めてきたときに協力して困難を乗り越えていくことが、発展途上国のカンボジアにできるボランティアなんじゃないかなと思いました。

このツアーに参加して、海外に携われる仕事に就きたいと思う気持ちが強くなりました。

インターンシップで感じたこと

中央大学法学部政治学科1年 関東出発

小さいころは、「国際協力といえばボランティア」という認識であった。しかし、ひとつの話を聞いて、その認識が揺らいだ。その話は、栄養失調の子供を助けるために、粉ミルクと哺乳瓶を提供したが、現地は水不足で衛生状態も悪いため、哺乳瓶を十分に洗うことができなかった。そして、栄養豊富な粉ミルクによって増殖した雑菌が哺乳瓶の使い回しにより乳幼児に蔓延、このボランティア行為によって多くの子供たちが死亡したというものだ。この事例を知り、国際協力として行われているボランティアは、本当に途上国のためになっているのか、という疑問をもった。

このようなありがた迷惑ともとれるボランティアの事例が存在することに留意しつつ、途上国に本当に必要な支援とはどのようなものか、自分はどのように途上国の問題にアプローチをしていきたいのかを考えるのが、今回のツアーの私の目的であった。

今回のツアーの事前学習として、私はカンボジアのごみ山を調べた。ごみ山は崩落事故などの安全面、有害な煙などの健康面でスカベンジャーに危険をもたらすというマイナス面があるが、一方で、スカベンジャーに仕事をもたらすという面もある。これにより、単にごみ山を撤去するだけではごみ山問題は解決せず、スカベンジャーがほかの安全な仕事につけるようにしなければ、ごみ山問題は解決しない。したがって、スカベンジャーをほかの仕事へ転職させた後に、ごみ山を安全なごみ処理場へと変えるのがよいのだと考えていた。

しかし、実際にごみ山へ行って話を聞くと、自分は見当違いな考えをしていたのではないかと思わされた。今回私たちが訪れたごみ山では、1日の収入がおよそ2.5ドルと、予想していたような低賃金労働ではなかった。また、近くに病院があり、無料で診察を受けたり、水をもらうこともできるという。スカベンジャーの中にはほかの仕事に転職した人もいないが、転職したいと思う人もいないようだ。ごみ山を管理する方もいらっしや、近隣住民の要求も受け入れながらわだかまり無く暮らしているようである。自分が予想していたほどごみ山での生活の状況は悪くないようであった。

もちろん、すべての人がごみ山での生活に満足しているわけではなく、ごみ山を出て仕事をするのを夢見る子供たちもいた。しかし、多くの人は納得してごみ山で働いているようであった。そして、近隣住民や管理人の方も、彼らに特別な嫌悪感を持っているわけ

ではなさそうであった。ごみ山はよくないものであり、そこで働く人はもっと安全な仕事に変わるべきであると勝手に思っていたのは私であった。実情にそぐわない私の認識が、ごみ山を必要以上にごみ山問題という意識で捉えてしまったのである。

最初に挙げたボランティアの失敗とも言えるような事態は、ボランティアを行う人が相手国の事情をきちんと認識していないことが原因だと思われる。そして今回、ごみ山研修を通して、私自身が自分の認識がずれていたことに気がついた。ごみ山について調べ、何が必要か自分なりにしっかり考えたつもりであったが、やはり、現地に赴くことなく考えたことは、実情にそぐわないものになってしまう。そのことを、身をもって感じる事が出来た。

この経験から考えたことは、本当に必要な支援というのは、現地を訪れて、現地の方々とコミュニケーションを取らなければわからないということだ。そして、今の私に出来る直接的な支援はあまり無いのだと思う。今の私に出来ることは、途上国に必要なことを考え、仮説を立て、今回のように現地を訪ねて自分の考えを確かめてみてギャップを体感し、その経験を発信していくことだと思う。

今回のツアーでは、宿題となった事前研修、事前に配布された資料、ツアー中のディスカッション、交換日記などを通し、たくさんのことを自分たちの頭で考えることができた。私はごみ山を取り上げて記述したけれども、他にもたくさんことに気づき、たくさんの疑問を持った。これらのことをそのまま忘れてしまうのではなく、これからの大学3年間を通じて、考え続けていきたいと思う。

私にできること

多摩美術大学美術学部グラフィックデザイン学科 2年 (関東出発)

初めてクラスで会う人。初めて行く店で出会った店員さん。電車で隣に座った人。誰でもいい、初対面の人に、私たちは普段、不躰な質問をすることはできない。当たり障りのない話をして、何回も会って仲良くなってからやっとお互いが思っていること、感じていることを話し合うことができる。でも今回のツアーは、私たちは勉強のためにたくさんの初対面の人に話を聞いて、たくさんの質問をした。その中には、普段会う人にしたら失礼だと相手に思われる質問もあった。

例えばゴミ山に暮らしている人に、「このように暮らすようになったきっかけはなんですか?」「今の生活を続けていきたいと思いませんか?」と質問したが、初対面の人にそのような質問をするのは失礼に当たるのではないかと。私が反対の立場だったら、自分のプライバシーを見ず知らずの人に話したいとは思わない。

今回のツアーでも、そして国際協力の場面でも、私たちは勉強のためとか相手のためとかそういった大義名分を身にまとして相手の気持ちを無視して人の心を踏みにじってしまうことがあるのではないだろうか。でも、相手を救おうとすることってというのは、全部そういうことなのかもしれない。多かれ少なかれ驕りがあるって、エゴで行動している部分もあると思う。

最後のディスカッションで、自分たちにできる国際協力について話し合った。人によって差はあったけど、みんなの意見は概ね今の自分たちにできることはないということでもまとまった。

国際協力のために働いている人はたくさんいる。その活動に救われている人もたくさんいる。でもそれは、打算的な関係に近く、対等な立場でお互いにやり取りするんじゃなくて支援を受ける方は支援を受ける側の立場や考え、支援する方にもそこに打算や相手を自分たちの思い通りにしたいという思惑があるように感じる。でもそれで救われている人がいるのも事実で何が正しいとは一概に言えないが、相手を救おうとして行動することが本当に相手のためになることかどうかはわからない。

国際協力は規模の大きい話だけど、普段の活動でも同じことだと感じた。道ばたで何か困っている人を見かけたとき、友達に相談されたとき、家族のことを考えたとき。普段相手のためになにかしてあげたいと思うことは多いけど、おせっかいかもしれないし、的外れかもしれないし、巡り巡って相手のためにならないかもしれない。

でも、私は世界中の人に一人でも多く幸せになってほしい。そして、そのために何かできるのだったら何かしたい。今回のツアーで何が人のためになるのかますますわからなくなったけど、「人のためにできることなんてない」と考えることをあきらめるのではなく、自分にできることはなにかを考えていきたいと思った。

最後に、このような文章を書いたけど今回のツアーは非常に学ぶことが多く、興味深くて

とても楽しかった。普段でできない貴重な体験をたくさんできたことは自分の糧になったし、一緒にツアーに参加した人たちやカンボジアの現地の人などたくさんの素晴らしい人たちに出会えたことにとても感謝しています。

JAPF 春期短期インターンシップ

3月5日午後一時頃、飛行機が時間通りに成田空港に着陸し、12日間の東南アジアの旅が終わりました。今、その短い12日間を振り返って定義してみると、インターンシップよりむしろ旅のほうがもっと適切だと思います。なぜかという、見学、勉強だけではなく、その12日間を通じて、私は心が鍛えられた感じがするわけです。

正直に言うと、行く前に、私はカンボジアやベトナムに対して、暑い、貧乏、飢餓などネガティブなイメージばかり持っていました。どのように現地の人々に接するべきかはまったく想像できなかつたです。特に、カンボジアはまだ開発途上国であり、資源不足、悪劣な衛生状況、政府腐敗など様々な問題が存在し、そのような国が好きになるわけがないと思っていました。しかし、実際に行くと、孤児院の子供たちは天真爛漫な笑顔で私を迎えてきて抱きしめてくれた時、言葉の障壁があるが、心が繋がっていると感じ、この笑顔が溢れた国に惹きつけられて、とても不思議な気持ちが湧いてきました。日本語学校の学生さんも歌や踊りで私たちを迎えました。彼らといろいろ交流し、昼間は日本語学校、夜は夜間大学、帰宅しても兄弟の面倒を見なければならぬ学生さんが何人がいたそうです。私たちは優れた教育に恵まれているが、彼らのような勤勉さがなく、非常に恥ずかしいと思います。それと同時に、カンボジアの教育現状を変え、カンボジアの人材育成に力を入れることはカンボジア政府が直面している難問の一つだと考えています。

歴史を知るとということも今回のインターンシップの重要なポイントだと思います。収容所、KILLING FIELDなどカンボジア ポルポト政権時代の残酷な虐殺を再現し、その時代のリーダーは自国の国民に対してこんな非人道的な行為をするなんて、恐ろしくて信じられないと思います。それに似ている中国昔の文化大革命も思い出しました。やはり、どの国の政治家でも、政権を維持するために、強硬な手段を使う傾向が見えます。収容所の見学で一番印象を残ったのはそのポルポト政権の時代を経て幸いにして生き残ったおじいさんが自分の本を売っていることです。私はみんなにその悲惨な時代を知ってほしいという気持ちを持っているが、自分の場合なら、やはり愛している人を失った苦しさを繰り返して話したくないと思います。本当に自分の過去を商品として売っていいのかな、たぶん彼は生きるために商売せずを得ないのではないだろうか。どう考えても悲しいです。

このインターンシップを通して、カンボジア、ベトナムの社会基礎知識だけでなく、社会問題を考えるにつれ、前よりもっと問題を深く考えることができるようになった気がします。それは予想以上の成果だと思います。現地ですべてを見て、話して、聞いて、触れて、感じて、そして学んだことはすべて私のいい思い出になり、一生の宝物になりました。再び、この素晴らしい12日間を一緒に味わってきた仲間たち、スタッフたちに感謝の意を申し上げます。

「インターシップを終えて」

東京外国語大学言語文化学部 1 年

私は、高校生の時に英語の授業で、途上国の労働状況についてのニュースの記事を読み、その時に日本で私たちが安く物が買えるのは、途上国の人々が安い賃金で労働しているからだと知りました。また、その時にカンボジアにいるスカベンジャーの人々についても知りました。そういう人達のおかげで自分が充足した生活を送っていることに気づき、今までそれを知らなかった自分に腹が立ち、その現状を悲しく思いました。それ以来、途上国の人々の力になりたい、どんな人たちでも国際協力に関わりたいという思いを持ち続けてきました。そして今回、自分ができることは何なのか、カンボジアとどう関わることが正しいのか、それを考えるために実際にカンボジアの状況を自分の目で確かめたいと思い、このインターンシップに参加しました。

12日間滞在してみてわかったのは、私の予想に反するものでした。カンボジアは確かに歴史の深い爪痕があり、生活も、土地が買えないという理由で水上に住む人々もいれば、都市部を離れると最低限のインフラもない所に住む人々もいました。しかし、水上に住む人々も、ごみ山に住む人々も、孤児院の子供たちも、どんな状況だろうと彼らは常に笑顔でした。私は、彼らは辛い毎日を送っているのではと思っていましたが、そんなことはありませんでした。先進国に住み、より便利なもの、より良いものを何でも欲しがり、消費し続け、どこまでも欲がみたされないのでどこか虚しく過ごしている私たちよりよっぽど精神的な豊かさを持っていました。彼らは1日を一生懸命に生き、生きることを全うしているのだと切に感じました。

そうして、彼らの現状を見て、自分のずっと持ち続けてきた思いは、先進国に住む自分のものさしで彼らを見ていたからだと気づきました。どこかで彼らを、「私の生活と違って貧しいから可哀想」と思っていたのです。でも、その「貧しい」も、お金という点からであって、彼らの心は貧しくなんかありませんでした。それがわかったことで、国際協力といっても、私たちが思う豊かさや理想を作りあげるのではなく、彼らが望む豊かさや理想に近づける手伝いがしたいと思いました。なので、何でもかんでも助けるのではなく、彼らが助けを必要としていることに手を差し伸べたいという思いが新たに生まれました。そのためには、自分の今の勉強を頑張って専門分野を持つことが必要であり、カンボジアについて目を向け続け、現地の人と関わる機会をこれからも持ち続けたいと自分なりに考えました。

日本に帰ってきた今、今度は自分の思いを行動に移していきたいと思います。今回学んだように、価値観のことなど国際協力にはまだまだ問題があると思います。しかし、だからといって私は手を差し伸べることはやめたくありません。そういった問題をどう解決するか試行錯誤しながら、自分なりの国際協力を模索していきたいと思います。

多様性の中で

東京学芸大学 初等教育教員養成課程 日本語教育選修2年

「わたしたちは、今を生ききれているのだろうか。わたしたちは、必死に今を生きられているのだろうか…。」4日目に訪れた KURATA ペッパーの開業者である倉田さんの言葉を忘れることができない。なぜなら、カンボジアで必死に物乞いをする子どもたちや、ゴミ山でお金になりそうなものを一日中探しまわり生活をしている人、いつか日本に行きたいという夢をもち、目を輝かせながら日本語学校で勉強する生徒たち…。日本で毎日をなんとなく過ごし、目の前にある課題を坦々となしているような生活をしてきたわたしにとって、12日間、直視してきたカンボジアの人たちの「必死に生きる」生き様は、とても素晴らしく思え、今の自分の姿が恥ずかしく思えたからだ。

帰国してから、この12日間での学びを踏まえて、自分に出来ることはなにかと考えたとき、わたしという存在は世界にとって本当に小さな存在だということを思い知らされた。しかし、この12日間をもう一度冷静に振り返ってみると、海外で初めて見る景色や食べ物に心を躍らせたり、研修先で様々な疑問を投げかけ、カンボジアの未来、また日本の未来をよりよいものにするにはどうすればよいのか、夜遅くまで仲間と頭を悩ませたり…と、必死になにかを吸収し、必死になにかを生み出そうとしていたわたしたちの姿はきっと、倉田さんの言う「必死に生きていた」のではないかと思った。

そして、いまわたしができることは、あの12日間必死に生きていたように、日本にいる中でも、自ら学び続けることではないのかと考えた。自ら学び、吸収し、そこから新たに自分の考えを生み出す。その繰り返しをすることが、いまのわたしにできることだと思うし、カンボジアの未来、そして日本の未来を考える礎になると感じている。

初めて行く海外の地、初めて会うカンボジアの人々、初めて会う仲間たち。このように多様の中でしか感じる事の出来ないものがたくさんある。景色、食べ物、におい、音、雰囲気…全てがわたしにとって新鮮であった。また、たくさんの人々と関わるなかで、認識させられる価値観の多様性があった。いままで自分が生きてきた世界から、ほんの少しの勇気を出し、一歩足を踏み入れることで、こんなにも世界は広がるし、こんなにも多くの多様性に気づかされる。この、一歩を踏み出す勇気をいつまでも持ち続けていたいし、「必死に生きる」姿、そしてその素晴らしさをいつまでも忘れないでいたい。

2014年 JAPF ベトナム・カンボジアインターンシップ

日本大学経済学部1年

今回の研修は本当にいろいろと考えさせられた12日間でした。この研修に参加しようと思ったのは直接的には友人の誘いですが、昨年度の経済分野の研修内容がゼミの活動内容と同じだったからという理由でした。今年度はまた違ったものでしたが、カンボジア、ベトナムというこれから大いに発展していくのであろう国の実情をさわりだけでも知ることができて、有意義な学びを得られたと思います。そして日本に帰って来て思ったのは、本当に日本は様々な意味で安全な国であるということでした。水道水はそのまま飲むことができ、野菜は洗ったものを直に口を付けて食べられます。深夜でも小さな子が一人で外を歩けるし、財布がかばんやポケットから見えていてもスリに遭うことはまれなこと。そんな世間を見て改めて“安全”に恵まれたところであると感じました。

経済分野では“ヒト・モノ・カネ”が資源であると言われていています。私が今回の研修中で一番印象に残ったのは、その資源の内の一つであるヒト、市場や遺跡で物を売る子どもたちでした。言われた、言っていた言語は英語、日本語、中国語、その他欧米系の言語を合わせて5、6に上ります。そこに自国の言葉を合わせると彼ら彼女らは優に7ヶ国語を話せるのです。逆に大人は英語くらいしか話しているのを聞きませんでした。英語を中学から、大学から第2外国語を私たちは学んでいますが、それを実生活で活かせるかと言われると、ベトナム、カンボジア両国滞在中は単語の羅列か単純なフレーズしか使えませんでした。商売の収入がその日の生活費に直結している暮らしだからより稼ぐために、という理由があるのでしょうか、子どもたちの7ヶ国語を話せるその記憶力と柔軟性に驚かされました。研修先の一つであったカンボジア芸術文化省の方も“遺跡などでもものを売っている子どもたちに可能性がある”とおっしゃっていました。どうにかして彼ら彼女らに教育を施して観光業の支えにしたい、とも。子どもは無限の可能性を持つ、とはよく言われる言い回しですが、本当にそうであると実感しました。もし、子どもたちが覚えた幾つもの言語を忘れることなく、もっと高度で専門的な教育を受けることができれば、安穩とした生活の中で学校をサボることばかりを考えている日本の学生よりも遥かに世界で通用する人材になると思いました。

12日の研修でディスカッションを何度もやりましたし、同室の子と話をすることもありました。自分と似た意見もありましたし、全く違う意見を言われることもありました。私はどうしても経済の点から考えてしまうのですが、色々な学部と年齢の人と話すことで様々な視点からの意見を知ることができてよかったと思います。研修先でもディスカッションでも本当に色々と考えさせられる、有意義な12日間でした。ここから得られた体験をいかに生かすことができるかが本当の意味での研修を終えたと言えると思うので、これからの大学での学びをさらに真剣に取り組みたいと思いました。

JAPF 春期短期インターンシップ「関東出発」

法政大学人間環境学部 2 年

私は、2014 年 2 月 22 日から 3 月 5 日までの 12 日間、カンボジア、ベトナムに短期のインターンに参加しました。私がこのインターンに参加したのは、今回の経験を自分の研究分野である「社会保障」についての研究材料にするためです。春休みのうちに医療や教育そして貧困といったテーマを海外で学べたらいいなと思い、今回のインターンに応募しました。

インターンでの施設研修は私の中でとても貴重な体験となりました。12 日間という限られた時間の中で、本当に多くの施設やそこで生活している人、またはガイドさんの話を聞くことができ、机上では得ることのできない、素晴らしい体験ができたと思います。

しかし、それ以上に大きな収穫を私はこのインターンで得ることができました。それは、一緒に 12 日間のインターン生活を送ってきた仲間との時間です。参加者は、大学生から大学院生など年齢も様々で、また専門分野も異なります。そうすると、ディベートの中では様々な角度からの視点が生まれますし、自分の意見を見つめ直すきっかけともなります。特に教育の分野は今まで無頓着でありあまり触れてこなかった分野でしたが、教育の充実は人々の将来を左右するととても重要な要素だと気づかされました。また、インターン生活での仲間との意見交換の場はディベートだけではありません。長いバス移動の時間も引率の学生スタッフのおかげで、施設内でインプットした内容を、隣の席や周りの席の参加者ときちんとアウトプットとする時間が設けられていました。また、参加者同士の会話ではお互いの大学生活や専門分野についても話したりします。そこからは、自分よりも勉強や研究を努力している人が多くいて、今後の自分の大学生活によりいっそうの励みになりました。

人と関連して、カンボジア、ベトナムでは多くの人が今を生きるために必死に努力している姿勢にも圧倒されました。日本語学校の生徒は、私と同年齢ぐらいの生徒が多く、将来通訳や学校の先生になるために自らを厳しい環境に置き、努力している様子は胸に響くものがありました。

このような感じで、12 日間はあっという間に過ぎていきました。現地では、勉強だけでなく、マーケットやレストランや遺跡巡りなど楽しい思い出もたくさんあります。しかし、これらの経験を楽ししい思い出だけで終わらせてはいけないと思います。今の私には、今後の大学生活、そしてその先の生活をどのように過ごすかが問われています。

今の日本の社会保障は、高齢者から若者へとシフトしようとしています。私は、そういった日本の流れのなかで、これからの若者にどういった支援が必要なのかを、今回のインターンで培った多様な視点を持つことで、勉強していきたいと思います。

最後に、改めて今回のインターンに携わったスタッフの皆様、貴重な体験をさせていただき、本当にありがとうございました。

12 日間を振り返って

法政大学法学部 2年 関東出発

カンボジアでのインターンシップは私にとって内容が非常に濃い 12 日間でした。せっかくの春休みに英語圏へ短期留学する大学生も多いのですが、私はカンボジアへ行くことを決意しました。カンボジアに行ったことある人は周りに少なく、発展途上国であり環境は良くない危ないイメージをもたれている方がほとんどでした。このため、私がカンボジアに実際に赴き、現状を知り、現地で見えたもの、感じたことについてカンボジアを知らない人に伝えたいと考えました。

ベトナムからカンボジアに国境をまたいだとき、島国である日本では体験できないため、自分の足で国境を越えることにとっても興奮しました。いざカンボジアに入国したときには、自分が想像していたカンボジアとイメージと違いました。そのことが一番感じ取れたのは都会であるプノンペンに到着したときでした。プノンペンの多くの建物には、春聯という中国では入り口に飾られる詩文を書いた赤い紙が貼られていました。さらに町中のスーパーやビルにはクメール語と中国語で大きく名前が書かれていました。このことから、現在多くの中国人がカンボジアに商売進出していることを実感しました。またカンボジアの都会は私が想像していたよりも発展しており、少し驚きました。しかし、その発展は中国や海外からの企業などが多く、カンボジアの人がそこに頼らなければいけない現実も感じました。

そして私が研修で最も強く心に残ったことは、ある晩の夜に行われたディスカッションです。その日のテーマは「カンボジアの自立のために必要なことは何か」というものでした。これはさまざまな研修先を見てきて、必要なものを考える上で何か思いつけば、また他に必要なものが現れ、簡単にはまとめづらいテーマでした。しかし今研修の 12 日間を振り返ってみると、カンボジアにとって必要なものは、先ず国と国民の信頼ではないかと考えました。それはカンボジアでは自国の通貨を信用できないために、アメリカドルを使用していることから現れていると思います。特に、トンレサップ湖で見た水上マーケットでは、船の住民が自分の住所を持っていないことが印象的でした。これは政府が国民の人口を把握していないことや、税金を取り立てにくいことからカンボジアの経済発展を足止めしている一つの要因ではないかと感じました。また国民一人一人に選挙権が十分活用されておらず、政府への民意の反映が難しい現状が日本とは異なることを知りました。だから国と国民の信頼があれば、発展促進にも繋がり、カンボジアの自立が進んで行けるのではないかと考えました。

研修の後半には観光省を訪れましたが、現在アンコールワットを見るために観光客が増加しており、観光に力を入れた取り組みを知りました。確かにカンボジアは都会と都会から一步離れた農村などでは環境が全く違い、まだ発展途上国ゆえに先進国の支援が必要です。しかし発展途中の段階ではあるが、逆に発展の見込みは十分あり、観光省や経済特区

の政府の取り組みが率先して、カンボジアが発達していく事に期待します。

そして帰国した私がすべきことは、12日間の研修で見たもの、感じたことをカンボジアに行ったことない人に伝えることであり、日本企業の東南アジア進出が増えている今、どう向き合っていくか考えて行きたいと思います。

研修でお世話になった素敵なスタッフや、メンバーの皆さんとの出会いに感謝しています。ありがとうございました！

インターンシップを終えて

明治大学商学部 1 年 関東出発

私がこのツアーに参加した理由として、アンコールワットを見ることができるという旅行を兼ねている感覚でした。アンコールワットは素晴らしく、修復作業は貴重な経験となりました。しかしそれ以上に印象に残った事も多々あります。クラタペッパーでの倉田さんのお話、日本語学校の生徒の意識の高さ、ゴミ山のスカベンジャーの方のお話等で今までの自分の考え方が浅すぎたと実感できました。

自分が正しいと思ってやっていることが実は相手に迷惑を与えているかもしれないという話を聞き、なぜ今このような状況になっているのか、人々が本当にしてほしいことは何かを考えて行動することが大切なことだと学びました。このことは普段の生活に十分に当てはめることができると考えます。相手が本当に求めていることは何なのかを相手目線で考えれば次に何をすればいいかが分かるようになるはずです。ツアー中のディスカッションでは考えていることを他の人に発表するため、自分の考えをまとめることに慣れるようになったとツアー終了後実感しました。

最も研修で印象に残ったこととしてカンボジアの文化芸術省並びに観光省に訪問し、実際の職員の方の話を聞いたことがあります。どちらも国の代表のため良い待遇でしたが問題があったように思います。文化芸術省の問題点としては圧倒的なお金不足が挙げられます。この解決策としてはディスカッションでも議論に出ましたが、具体的にすぐに解決することができないため時間が必要だと考えられます。また、観光省での問題点として、ビジョンが見えていないことを感じました。全ての計画が 2020 年までの計画となっており、それ以降の計画は皆無であるとのことでした。発展のためには短期的な目標はもちろんですが、中長期的な目標が必要です。短期的な目標だけでは締切直前に無理やり目標達成をしようとする可能性があります。また、長期的な目標がないために将来にどのようなになりたいかというビジョンが見えてこないという弊害もあります。このように考えることができるようになったのはこのツアーのおかげです。日本にいたままではこのように考えることは決してなかったと思います。

このインターンシップツアーではたくさんの人に支えられました。JAPHの方、引率のスタッフさん、ガイドの方々、18 人のツアーを共にしたメンバー、ベトナム・カンボジアで出会った全ての方々。これら全ての人に支えられて無事に 12 日間のインターンシップを終えることができました。この出会いに感謝をし、これから自分なりにこのツアーが有意義であったことを証明していきたいと思います。

インターンシップを終えて

明治大学農学部2年（関東出発）

私は、経済成長が著しいアジアの現状を自分の目で見てみたい、という思いからこのインターンシップへの参加を決めました。12日間を通して、ベトナムとカンボジアの様々な場所に行き、様々なものを見、様々なことを考えました。その中でも、現地の方に実際に会い、話をすることで、「幸せ」について考えるようになりました。

出発前、私はベトナムとカンボジア、特にカンボジアという国に対して「危険な国」「貧しい国」というマイナスなイメージしか持っておらず、楽しみよりも不安に思う気持ちの方が強かったです。また、そこに住む人々は恵まれていない、大変苦勞している、と思い込んでいました。

このような私の考えが変化したのは、孤児院を訪れた時です。孤児院を訪問する前、私は孤児院にいる子どもたちは親がいないから可哀相だと思い込んでおり、そのような子どもたちとどのように接していけばいいのかわかりませんでした。しかし、私たちが到着するとすぐに子どもたちが来て、手を引っ張って私たちを案内してくれました。はじめはとても驚きましたが、子どもたちの笑顔に安心感を覚えました。その後、一緒に折り紙を折ったり食事をするなかで、この子どもたちは親はいないかもしれないが、それでも友達と遊んだり、先生方に見守られながら幸せな生活を送っている、と思うようになりました。同時に、訪問前に子どもたちに対して同情に近い気持ちを抱いていた自分の考えの浅さを、情けなく思いました。今でも、子どもたちの幸せそうな笑顔が忘れられません。

また、電気が水が通っていなくても、車のバッテリーなどを使うなどの工夫をして生活する農村の方々や湖上で生活する方々を見て、その生活様式を受け入れている、と感じました。電気があり、水道があり、住所があるのが当然となっている私たちから見るとその生活は不便かもしれませんが、本当に幸せかどうかは、実際に生活しているその人にしか分からないと思いました。

このインターンシップを通して、様々なことに興味を持ち、一つのことに對して様々な考えを持とうとするようになりました。12日間、引率をはじめとする沢山の面でサポートしてくださった若江さん、猿渡さん、共に遊ぶときは遊び、学ぶときは真剣に学んだかけがえのない仲間たち、そして自分の考えを変えるきっかけとなったカンボジアの方々のお陰で、普通の旅行では考えられないような有意義な時間を過ごすことができました。本当に参加して良かったです。ありがとうございました。